

根岸お行の松 因果塚の由来

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

昔はお武家が大小を帯さしてお歩きなすったものですが、廢刀以來幾星霜を経たる今日に至つて、お虫干の時か何かに、刀箆筒から長い刀やつを取とり出いだして、これを兵児帯へこおびへ帯して見るが、何どうも腰の骨が痛くツて堪らぬ、昔は能よくこれを帯して歩けたものだど、御自分で駭おどろくと仰しやつた方がありましたが、成程是は左様でござりましょう。なれども昔のお武家は御氣象が至つて堅い、孔子や孟子の口真似をいたして、頻しきりに理窟を並べて居おるといふ、斯こういふ堅かたじん人が妹に見込まれて、大事な一人娘を預かつた。お宅は

しもねぎし
下根岸もズツと末の方で極く閑静な処、屋敷の周囲は矮い生垣
になつて居まして、其の外は田甫、其の向に道灌山が見える。
折しも弥生の桜時、庭前の桜花は一円に咲揃い、そよよと春風
の吹く毎に、一二輪ずつチラリくと散て居る処は得も云われざ
る風情。一ト間の裡には預けられたお嬢さん、心に想う人があつ
て旦暮忘れる暇はないけれど、堅い氣象の伯父様が頑張つて居
るから、思うように逢う事も出来ず、唯くよくと案じ煩い、
…今で言えば肺病でござりますが、其の頃は癆症と申しまし
た、寝衣姿で、扱帯を乳の辺まで固く締めて、縁先まで立出
ました途端、ブーツと吹込む一陣の風に誘われて、花卉が一輪
ヒラ〜と舞込みましたのをお嬢さんが、斯う持った…圓

朝たくしが此こん様な手附をすると、宿無やどなしが虱しらみでも取るように可笑おかしいが、

お嬢ほっさんは吻ほっと溜息をつき、

娘「ア、……、何うして伊い之のさんは音信たよりをしてくれぬことか、

それにつけてお母つかさま様もあんまりな、お雛様を送つて下すつたの

は嬉しいが、私を斯ういう窮屈うちな家へ預け、もう生涯あ彼の人に逢

えぬことか、あ、情なさけない、何うかして今一度逢いたいもの……」

と恨めしげに涙ぐんで、斯う庭の面おもを見詰みつめますと、生垣の外に

頬ほ被かぶりをした男たが佇たんで居おる様子、能よく々透かして見ますと、

飽かぬ別れをいたしたる恋人、伊い之の助さんではないかと思つたか

ら、高たか棲づまをとつて庭下駄を履き、飛石伝いに段々きた来つて見ると、

擬まごうかたなき伊之助でござりますから、

娘「おゝ伊之さん能くまア……」

と無理に手を把つて、庭内へ引込んだ。余り慌あんまてたものだから少し膝頭すりこわを摺すり毀こわした。

娘「まア〜此方こつちへ」

手を把つておのれの居間へ引入れましたが、余り嬉しいので何も言うことが出来ませぬ。伊之助の膝へ手を突いてホロリと泣いたのは真の涙で、去年こぞ別れ今年逢う身の嬉しさに先立つものはなみだなりけり。是よりいたして雨の降る夜よも風の夜も、首尾を合あははりにお若わかの計わらい、通える数も積りつゝ、今は互たがいに棄てかねて、其なかるしの情漆膠がわの如くなり。良しや清水しみずに居おるとても、離れまじとの誓ちかいごとは、反故ほごにはせまじと現うつを抜かして通わせました。伊勢

の海阿漕あこぎケ浦に引く網もたび重なればあらわれにけりで、何時いつしか伯父様が氣附いた。

伯父「ハテナ、何うしたのだろう、若は 脹ちようまん 満まん か知ら」

世間を知らぬ老人は是だからいけませぬ。もうお胤たねが留とまつては隠すことは出来ない。彼あれは内から膨ふれて漸だん々く前の方へ糶せりだ出して来るから仕様がな。何うも変だ、様子が訝おかしいと注意をいたして居ました。すると其の夜よ八やツの鐘が鳴るを合図に、トン／＼とんと雨戸を叩くものがある。お若は嬉しそうに起上つて、そつと音せぬように戸を開けて引入れた。男はずつと被かむし手拭てぬぐいを脱とり、小火鉢くわいの向うへ坐した様子を見ると、何うも見覚みおぼえのある菅野伊すがのい之助らしい。伯父さんは堅かたい方だから、直すぐに大だい刀とうを揮ふるつて躍おどり

こ
込み、打斬うちきろうかとは思いましたが、もう六十の坂を越した御
老体、前後の御分別がありますから、じつと忍耐がまんをして夜明を待
ちました。夜が明けると直すぐに塾の書生さんを走らせて鳶頭かしらを呼び
にやる。何事ならんと勝かつごろう五郎は駭おどろいて飛んで来ました。

勝「へい、誠に御無沙汰を……」

主人「サ、此方こつちへお這入り、久しく逢わなかったが、何時いつも貴
公は壮健で宜よいノ」

勝「へい、先生もお達者で何より結構ですが、何うも存じなが
ら大御無沙汰をいたしやした」

主人「まア此方こつちへお出いで、何うも忙しい処を妨げて済まぬナ」

勝「何ういたしまして、能よく々の御用だろうと思つて飛んで来

やしたが、お嬢様がお加減でもお悪いのでがすか」

主人「ヤ、其の事だテ、去年お前が若を駕籠に乗せて連れて来た時、先方から取った書付、あれ彼は今だに取つてあるだろうノ、妹の縁家えんか堺屋さかいやと云う薬店やくてんへ出入でいりの菅野伊之助と云う一いっちゆうぶし中節ちゆうぶしの師匠めいと姪めいの若が不義をいたし、斯様かようなことが世間へ聞えてはならぬと云うので、大金を出して手を切つた、もつと尤も其の時お前が仲へ這入つたのだから、何も間違はあるまいけれど、どうか当分若を預かつてくれと云う手紙を持って、若同道でお前が来たから、その時私わしが妹の処へんじへ返詞を書いてやつたのだ、手前方あずかへ預れば石の唐櫃かろうとへ入れたも同然と御安心下さるべく候そろと書いてやつた」

勝「ハイ〜成程」

主人「何でも伊之助なんと手を切る時、お前の扱いで二百両とか三百両とか先方へやったそうだな」

勝「エ、左様で、三百両確かにやりました」

主人「其の伊之助がもしも若もとの許へ来て逢引でもする様な事があつたら貴様済むまいナ」

勝「そりやア何うも先生の前めえでげすが、ア、やつてお嬢さんもぶらぶら塩梅あんべえが悪くツてお在いでなさるし、何うかお気の紛れるよ
うにと思つて、私わっしア身許みもとから知つてる堅かてえ芸人でげすから、私が
勧めて堺屋のお店たなへ出入でいりをするようになると、あんな優しい男だ
もんだから、皆さんにも可愛かあいがられ、お内儀かみさんも飛んだ良い人
間だと誉めて居らしたから、お世話効ががあつたと思つて居まし

た、処がア、云う訳になつたもんですから、お内儀さんが、此金
 で堺屋の鬩しきいを跨またがせない様にして呉れと仰しやつて、金子かねをお出
 しなすつたから、ナニ金子なんざア要りませぬ、私が行くゆなと云
 えばあが上る気遣いはござえませんと云うのに、何でもと仰しやるか
 ら、金子を請取うけとつて伊之助に渡し、因果を含めて証文を取り、お
 嬢さんのお供をしてお宅へ出ましたツ切きりで、何うも大きに御無沙
 汰になつてますので」

主人「ナニ無沙汰の事は何うでも宜よい、が、其の大金を取つて
 横山町よこやまちょうの横と云う字にも足は踏掛ふんがけまいと誓つた伊之助が、
 若の許へ来て逢引をしては済むまいナ」

勝「へエー、だツて来る訳がねえので」

主人「処ゆへが昨夜おれた己たが確しかに認めた、余り憎い奴だから、一思いに打斬ぶちきろうかと思つたけれど、イヤ／＼仲に勝五郎が這入つて居るのに、貴様に無断で伊之助を、無暗むやみに己ぶが打ぶつも縛るも出来ぬから、そこで貴様を呼びにやつたんだ、だから其処そこで立派もうしひに申ひ開らをきしろ」

勝「へエー、それは何うも済まねえ訳で、本当に何うも見損つた奴で」

主人「まあ己の方で見ると、貴様は金子かねを伊之助にやりはすまい、好よい加減な事を云つて金子を取つて使つちまつたらうと疑られても仕様がないじゃアないか、店たなの主人あるじは女の事だから」

勝「エ、御尤もで、じゃア私わつしは是から直すぐに行つて参ります、申

訳がありませんから、あの野郎、本当に何うも戯けやアがって、引張つて来て横ぼうずつ頬ほりを撲はり飛ばして、屹きつと度申訳をいたします」

其の儘おもて戸外へ飛出して直に腕車くるまに乗り、ガラ／＼ガラ／＼と両もとやなぎばし国元柳橋へ来まして、

勝「師匠、在宅か」

伊「おや、さお這入んなさい」

勝「冗談じゃアねえぜ、生なまぞら空ア使つて、悠々とお前めえこゝ此処に坐つて居られる義理か」

伊「え、何なんで」

勝「何もねえ、え、おい、本当に己はお前めえのために、何様どんなにか面皮めんぴを欠いたか知れやアしねえ、折角己が親切に世話アしてやつ

た結構なお店たなを、お嬢さんゆえにしくじって仕まい、其の時お内儀さんが此金これをと云つて下すつたから、ソツクリお前とこの許もつへ持て来てやつたら、お前が気の毒がつて、以来はモウ横山町の横と云う字にも足は踏かけめえと云つて、書付まで出して置きながら、何なんで根岸くんだりまで出かけて行くんだよ」

伊「え、誰がお嬢さんに逢つたんです」

勝「とぼけるない、お前めえが行つたんじやアねえか」

伊「まアあなた、そう腹立紛れに、人の言う事ばかり聴いてお出いでなすつちやア困りますナ、まア行つたなら行つたになりましようが……」

勝「昨夜ゆうべお前は、既に捕とつつかま捉まつて、ポカリとやられちまう処

だツたんだ、以前はお武家さむらいで、劍術やっとうの先生だから、処がモウ年を取つてお在いでなさるから、忍耐がまんをして今朝己を呼びによこしたんだが、何うしたツて己が何なんとも言訳がねえじやアねえか」

伊「マ、行つたと仰しやるなら行つたにもなりましようが、昨夜は何うしても行けませぬ、其の証人は貴方です」

勝「己が……何ういう」

伊「何うだツて、日暮方から来て、川かわ長ちようへでも行つてお飯まんまを喰いに一緒いっしょに行けと仰しやるから、お供をしてお飯を戴き、あれから腕車くるまを雇つてガラ／＼と仲へ行つて、山口巴やまぐちどもえのお鹽しおの許とこへ上つて、大層お浮れなすつて、伊之や／＼と仰しやつて少しもお前さんの側を離れず夜通し居た私が、何うして根岸まで

行ける訳がないじやアありませぬか」

勝「ウム、違えねえ、側に居たなア、何を云やアがるんで、耄もうろく

碌ウしてえるんだ、あん畜生ちきしょう、ま師匠腹を立ちやア往けね

えヨ、己は遂つい慌あわてるもんだから凹へこまされたんだ、己がお前めえに渡

す金を取つて使つたらうと吐ぬかしやアがった、ヘン、憚はげりながら己

だつて五百両や六百両、他人ひとの金子かねを預かることもあるが、三文

だつて手を着けたことはありやアしねえ、其様そんな事は大嫌でえきえな

人間なんだ、ちよいと行つて来らア、少し待つて居ねえ」

また腕車くるまを急がせて根岸のはずれまで引返ひっかえして来た。

勝「ハイ唯今」

主人「イヤ、大きに御苦勞、何うだ伊之助は居たか」

勝「エ、先生は昨夜伊之が此方へ来たと仰しやいますが、昨夜じやアありますめえ」

主人「ナニ、昨夜確に見たから、今朝貴様の許へ人をやったんだ」

勝「へエー、昨夜なら何うしても来る訳がねえので」

主人「何故なぜ」

勝「何故つたつて、何うも誠に先生の前では、些ちつときまりの悪い話でげすが、実は彼奴あいつを連れて吉原なかへ遊びに行つたんでげすから、何うしても此方こちらへ来る筈がごぜえませんで」

主人「ウム、それなれば何故、最初己が尋ねた時に爾そう云わぬのじゃ」

勝「へい、何うもそれがあわてちまいましたもんだから、誠に何うも面目次第もない訳で」

主人「吉原よしわらへ行つたと云うのか」

勝「へい」

主人「宵から行つたか」

勝「へい」

主人「それじゃア、まだ貴様だま欺されて居るのじゃ、吉原の引ひけと

云うのは十二時であろう」

勝「左様、一時から二時ぐらいが大おお引びけなんで」

主人「其の時に貴様を寝こかして置いて、自分は用よう達たしに行くゆとか何なんとか云つて、スーツと腕車くるまに乗つて来て夜明まで十分若に

逢つて帰れるじやアないか、貴様は伊之助に寝こかしにされたことを知らぬか」

勝「エ、寝こかし、成程、アン畜生」

主人「吉原と根岸では道程も僅だらう」

勝「左様、何うもあの野郎、太え畜生だ、今直に腕をおつぺしよつて来ます」

又出かけて来た。

勝「師匠、在宅か」

伊「先刻の事は冗談でしたらう」

勝「ナニ冗談も糞もあるもんか、え、おい、お前吉原から根岸まで道程は僅だぜ、何でえ、白ばつくれやアがつて、人を寝こか

しに仕やアがつて、行きやアがつたんだらう、枕許へ来てお寝やすみなせえとか何なんとか云やアがつて」

伊「ウフ、寝こかしにも何なににも極りを云つて居らつしやる、昨夜ゆうべは些ちつとも寝やアしないじやありませんか、あなたが皺しわ枯がれ声ごえで一中節ちゆうせつを唸うなつて、衣きぬ洗あらいから、童子対面どうしたいめんまでやつた時には、皆みんなが欠伸あくびをしましたよ、本当に可愛かあいそうに、酷ひどいじやアありませんか」

勝「ウム成程、寝ねえナ」

伊「それから夜が明けると朝湯あそに這入くつて腕車くるまで宅たくへ帰る間もなくお前さんが来たんですよ」

勝「成程、何を云やアがるんだ、あん畜ちき生しょう、ま師匠、堪忍

して呉んな、己おらア一寸行つて来くらア」

又慌てゝやつて来た。

勝「ハイ先生行つて来ました」

主人「何うした」

勝「何うにも斯うにも、何うあつても昨夜ゆうべは来こねえてんのです、彼奴あいつも私わつしも昨夜は些ちつとも寝ねえんですもの、ガラリ夜が明ける、家うちへ帰けえるとお人だから、直すぐに来きましたんで」

主人「エー、徹夜をした、ウゝム、私わしも老眼ゆえ見損いと云うこともあり、又世間には肖にた者もないと限からねえ、見違あいかも知れぬから、今夜貴様私の許とこへ泊とつて、若ないに内証ないしよで、様子を見て呉れぬか」

勝「じゃアそう為しましよう」

と其の夜は根岸の家うちへ泊とこ込み、酒肴さけさかなで御馳走おおもになり大酩めい

酩ていをいたして褥とこに就つくが早はやいかグウクウと高たかい 軒びきで寝ね込んで

了しまいました。夜よは深しん々と更ふけ渡わたり、八ツの鐘かねがボーンと響ひびく途

端はしに、主人あるじが勝五郎かつごろうを揺ゆり起おこしました。

主人「オイ、勝五郎かつごろうく」

勝「ハイ、ハア、ハイく、ア、お早はやう」

主人「まだ夜半よなかだヨ、サ此方こつちへ来こなさい」

と廊下らうかづたいに参まゐり、襖ふすまの建附たてつけへ小柄こづかを入れて、ギユツと逆

に捻ねじると、建具屋けんぐいさんが上手うまであつたものと見みえて、すうと開あい

た。

主人「サあれだ」

勝「へイ」

と睡ねむい目をこすりながら勝五郎は覗いて見ますと、火鉢を中に差向に坐つて居るは伊之助に相違ないから、

勝「ア、何うも誠に済みませぬ、慥たしかに伊之の野郎に違ちがえござえませぬ」

主人「それ見ろ、然しかるに何なんで昨夜ゆうべは来る筈はずがないと申した」

勝「イエ、昨夜は何うしても来る訳わけがござえませぬので」

主人「今夜けふのは確たしかに伊之助に相違ちがないナ」

勝「へイ、伊之の野郎で」

主人「それが間違まちがうと大おお事ごとになるぞよ」

勝「イエ、何様な事があつても、よ宜しゆうござえます」

主人「ウム宜し」

ソツと拔^{ぬきあし}足をして自分の居間へ戻り、六連発銃を^{もちきた}持来り、襖の間から斯^こう狙いを附けたから勝五郎は恟^{びつく}りして、

勝「まゝ先生乱暴な事をなすつちやアいけません、伊之の野郎^{ぶちころ}は打殺しても構やアしませぬが、もしもお嬢さんにお怪我でもありましては済みませぬから」

主人「イ、ヤ氣遣いな」

伯父の高根^{たかね}の晋齋^{しんさい}は、片手に六連発銃を持ち襖の間から狙いを定め、カチリと弾^{ひきがね}金を引く途端、ドーンと弾丸^{たま}がはじき出る、キヤー、ウーンと娘は氣絶をした様子。

晋「ソレ若が氣絶をした、早く〜」

此の物音に駭おどろいて、門弟衆がドヤ〜と来きたり、

○「先生何事でござります、狼藉者でも乱入致しましたか」

晋「コレ〜静しずかにいたせ〜、兎も角早う若を次の間へ連れて行き、介抱あかりいたして遣つかわせ」

是から灯火あかりを点けて見ると恟びつくりしました。其処そこに倒れて居たの

は幾百年と星霜を經ましたる古狸であつた。お若が伊之助を恋しい恋しいと慕うて居た情じょうを悟り、古狸が伊之助の姿に化けお若を誑たぶらかしたものと見えます。併しかし斯かような事が世間へ知れてはならぬとあつて、庭の小高い処へ狸の死骸うずを埋うずめて了しまつたという。

さりながら娘お若が懷妊して居る様子であるから、

晋「ア、とんだ事になった、畜生の胤たねを宿すなんて」

と心配をして居るうちに、十月経つても産氣とつき附かず、十二ヶ月目に生れましたのが、珠たまのような男の児こ、続いて後あとから女の児こが生れました。其の後のち悪因縁まっの齎まっわる処か、同きようだい胞いとにて夫婦になるといふ、根岸の因果塚のお物語でござりまする。

二

何事も究理のつんで居ります明治の今日、離魂りこんびよう病びようなんかてえ病氣があるもんか、篋べらぼう棒ぼうくせえこたア言わねえもんだ、大方支那の小説でも拾ひろいよみ読よみシアがツて、高慢らしい顔シアがるんだろ

う、と仰しやるお客様もありましようが、中々もつて左様そういうわけではございません。早いたと譬えが幽霊でございます、私わたくしなどが考えましても何うしても有るべき道理がないと存じます。先まず当今のところでは誰方どなたでも之には御賛成遊ばすだろうと存じますが、扱さてこゝでございます、お客様方も御承知で居らせられる幽霊博は士かせ……では恐れ入りますが、あの井上いのうえ圓了えんりょう先生でございます。この先生の仰しやるには幽霊というものは必ず無い物でない、世の中には理外に理のあるもので、それを研究するのが哲学の蘊う奥んおうだとやら申されます、そうして見ると離魂病と申し人間の身体が二個ふたつになつて、そして別々に思ひくゝの事が出来るというような不思議な病氣も一概いっぺいにないとは申されませ

ん、斯こういう誠に便利な病気には私わたくしどもは是非一度か罹りとうござ
います、まア考えて御覧遊ばせ、一人の私が遊んで居りまして、
もう一人の私がセツセと稼いで居りますれば、まア米こめ櫃びつの心配
はないようなもので、誠に結構な訳なんですが、何うも左そ様ようは問
屋いで卸やしてはくれず致し方がございません。

さてお若でございますが、恋こがれている伊之助が尋ねて来た
ので、伯父晋齋の目を掠かすめ危うい逢瀬に密会を遂げ、懐妊までし
た男は真実まことの伊之助でなく、見るも怖しき狸でありましたから、
身の淫いたずら奔を悔たまいて唯々ただ歎なげきに月日を送り、十二ヶ月目で産み
おとしたは世間という畜生腹。男と女の双児ふたごでございしますので、
いよく其の身の因果と諦め、浮世のことはプツ、リ思い切つて

仕舞いました。伯父もお若の様子を見て可愛そうでなりません、何うも仕様がなないので困り切つて居ります。何なんぼ狸の胤だからツて人間に生れて来た二人に名を付けずにも置かれぬから、男は伊い之の吉きち女はお米よねと名を付ける事になりました。茲こゝに一つ不思議なことに伊之吉お米で、双児というものは身体の好格かつこうから顔立までが似ているものだそうで、他人の空似とか申して能く似ているものを見ると、あゝ彼あの人は双児のようだと申しますから、真ほんも物の双児は似る筈ではございますが、男と女のお印が違つているばかり、一ちよつと寸見ると何方どちらが何方かさっぱり分りかねるくらい、瓜二つとは斯こういうのを云うだろうと思われ、其の上ふたり両児とも左の眼尻にぽツつり黒痣ほくろが寸分違わぬ所にあります。これが泣き黒

痣という奴で、この黒痣があるものは何うも末が好くないと仰しやる方もあり、親が子の行末を案じるは人情左様ありそうな事でお若はそんなこんなで大層両児を可愛がりますから、伯父の晋齋はますく心を痛め、或日お若が前に来て、

晋「赤児は何うしたね」

若「はい、今すやく寝つきましたよ、伯父さん本当に妙です

ことねえ、この児達は、泣き出すと両児一緒に泣きますし、また斯うやって寝るときもおんなしように寝るんですもの、双児てえものア斯ういうもんでしようか、私や不思議でならないんですわ」

晋「そうさな、己も双児を手にかけたこともなし、人から聞いたこともないから知らないよハ、ハ、ハ、ハ、赤児が寝ているこそ丁

度幸いだ、今日はお前に些ちつと相談することがあるがの、それも外のことじやアない矢ツ張赤児の事に就つてな、此様こんな事を云つたら己を薄情なものと思うだろうが、決して悪くとられちやア困るよ、それもこれもお前の為を思うから云うのだからね」

若「ハイ、何うしまして飛とんでもない心得違いから、いろく伯父様さんに御苦労をかけ、ほんとに申し訳がないんですわ、それに私の為を思つて仰しやることを何なんでまア悪く思うなんツて」

晋「イヤお前が左様そう思つて、呉れゝば己も安心というものだがの、斯こう云つたら心持が悪かろうが、その赤児だツて……、あの通りな訳で生れたもので見れば、何うもお前の手で育てさせては為になるまいし、今一いつとき時は可愛いそうな気もしようが、却かえつて他

人の手に育つが子供等らの為にもなろうと思われるよ、仮令よしどんな何様な訳
 で出来たからつてお前の子に違ちがいものだから、手放して他人ひと
 に遣やるは人情として仕し悪にくかろう、それは己も能よく察してはいるが
 ……、此の子供等が独り遊あそびでもするようになって見な、直すぐ世
 間の人に後指さなんれて何と云いわれるだろうか、其の時のお前が心
 持は何うだろう、お前ばかりじやないよ、お父とっさん様お母つかさん様をはじ
 め縁ゆかりに繋つがるこの己までが世間の口にかゝらんけりやならんだ、
 さア其の苦くるみをするよりは今のうち……な、それにお前とて若い
 身みそら、是なり朽ちて仕舞うにも及あげない、江戸は広いところだ
 から、今度の噂も知らないものが九分九厘あるよ、ナニ決して心
 配する事はないからね」

と晋齋がシンミリとした意見に、お若は我身に過りあやまのあること
 ですから、何なんとも返答することが出来ません。只ジツと差し俯伏うつむ
 いて思案にくれて居ります。伯父の晋齋はお若が挨拶をしないの
 は不得心であるのか知らんと思われる処から、

晋「お若、何うだね、得心が行かぬ様子だが、己はお前の身の
 為また子供等の為を思うから云うんだよ、能く考えて御覽、決し
 て無理を云つて困らせようなんかツて云うんじやないから……」

若「何うしまして決して其様そんなこたア思やしません、そりや最もう
 伯父様さんの仰しやる通り……」

と云い掛けてほろりと涙をこぼしましたが、晋齋に覺さとられまい
 と思ひますので、俄にわかに一層下を向きますと、頬のあたりまで半襟

に隠れ、襟足の通つた真ま白しろな頸筋はずつと表われました。お若の胸中を察し晋齋も不愜ふびんには思いますが、ぐずぐずに済しておいては為になりませんことですから、眼をパチクリ／＼致しながら、少しく膝を進ませました。

世の中に何が辛いつて義理ほど辛いものはないんで、我が身を思い生れた子供のことを心配してくれる伯父の親切を察しては、それでも私は斯うしたいの彼あしたいのと、勝手な熱を吹くことは出来ませんから、お若も是非がない、義理にせめられて、

若「何うか伯父様さんの好よいようにして下さいませ、こんなに御苦労かけましたんですから……」

と申して居るうち潤うるみ声になつて参ります。晋齋もお若なんが何と

いうであろうか、若しや恩愛の絆にからまれてダダを捏ねはせま
いかと心配致し、ジツと顔をながめ拳動をうかゞつて居りました
が、伯父様のよいようにと思ひ切つた模様ですから、まアよかつ
た得心して呉れて、と胸を撫で、

晋「あゝそれがいゝよ、己に任しておきな、悪いようにはしな
いからね、お前が左様諦めてくれゝば結構な訳というもんで……、
実はな、大阪の商人あきんどで越前屋佐兵衛さんえちぜんやさへえてえのが、御夫婦連で
江戸見物に来ていなさるそうでの、何でも馬喰町なに泊つてると
聞いたよ、この方がの最もう四十の坂を越えなすつたそうだが、ま
だ子供が一人もないから、何うか好いい女の児こがあつたら貰つて帰
りたいと探していなさるそうだよ、大阪あつちで越佐さんえつさと云つては大

した御身代で在いらつしやるんだからね、土地で貰おうと仰おっしやれば、
 網の目から手の出るほど呉てれ人はあるがの、佐兵衛さんてえのは
 江戸の生れなんで、越前屋へ養子にへえツた方だから、生れ故郷
 が恋しいツてえところでの、江戸から子供を貰つて帰ろうと仰し
 やるんだとき、それにお内儀かみさんというのも飛んだ気の優しい方
 だと云うことだから、米もそんなところへ貰われて行けば僥しあ倖わせと
 いうもんだらうと思われるし、世話するものがお前もよく知つて
 いるあの鳶頭かしらだからの、周旋なこうどぐち口をきいてお弁茶羅べんちやらで瞞ごまかす男で
 もないよ、勝五郎も随分そゝつかしい事はあの通りだが、今度の
 ことア珍しく念を入れて聞いてきたよ、あゝ、そりや間違いはな
 いよ、こんな口は又とないからの、お前さえよくば直ぐ話しをさ

せて、貰つて頂こうと思ふんだがね」

若「はい、伯父様さえよと思召したら、何うかよいように遊ばして……」

晋「よし、それでは承知だね、ナニ心配することはないよ」と晋齋は直ぐ勝五郎を呼びに遣りました。さて鳶頭の勝五郎でございませうが、今町内の折れ口から帰つて如輪じよりんもく目の長火鉢の前にドツカリ胡坐あぐらをかき、煙草吸つているところへ、高根のおさんどんが、

婢「鳶頭いお在いでですか、旦那様が急御用があるんだから直ぐ来ておくんないッて……」

勝「何うも御苦勞さま、直ぐ参めえりやす、お鍋どんまア好いいじゃ

ねえか、お茶でも飲んでいきねえな、敵かたきうちの家へ来ても口は濡らすもんだわな、そんなに逃げてく事アねえや、己おひら口説くどきアしねえからよ」

女「お鍋さんまアお掛けなさいな、今丁度お煮花にばなを入れたところですから、好いじやありませんかねえ、お使いが遅いなんかと仰やる家うちじやアなしさ、お小言こごが取りやア良うちのひと人からお詫させませアね、ホ、ホ、ホ、まア緩ゆるくりお茶でも召上めいじやうつて入いつしやいつてえ、そうですか、未だお使つかがいおあんなさるの、それじやアお止め申しては却かえつて御迷惑、またその中うちにお遊あそびにおいでなさいよ、その時ア御馳走ごちそうしますからね、左様さよなら何うもおそうそさまで、何うか旦那様へもよろしく、何うも御苦労さまで」

とお出入先の女中と思えば女房までがチャホヤ致し、勝五郎は早々支度をしまして根岸へやって参り、高根晋齋の勝手口から小腰をかゞめ、つツと這入ろうとしましたが、突掛つツかけぞうり草履でパタ／＼と急いで参ったんですから、紺足袋も股引の下の方もカラ真ツ白ほこりに塵埃がたかつております。無遠慮むえんりよな男でございしますが、この塵埃を見ますとまさかに其の儘にも這入りかねましたと見え、腰にはさんでおります手拭でポン／＼とはたき。

勝「エー、只今はお使を下せえまして」

婢「鳶頭旦那様がお待ちかねですから、さアお上りなさい、奥はなれの離座敷いらに在つしやるんですよ」

とお爨さんどんが案内に連れられ、奥へ参りますと、晋齋は四畳半

すが、ごろツちやらして居アがる野郎の二三人引摺ひきずつて来りやア
 訳のねえことでさア、宜うごす、明日あすアポンくと打ぶ壊こわしやし
 よう」

晋「おい〜お前は何を言ってるんだよ、私わしは何処どこも壊してく
 れなんかツてえ事い言いやしない」

勝「いけねえや、先生、昨日仰おやつたあの狸の伊之をドーンと
 お遣やんなすつたお座敷を毀こわすんでげしよう、あんな事ことのあつたお
 座敷は居心が良くねえから、ナニ外の仕事は何うでも押ツ付けて
 えて遣つ付けまさら」

晋「困るな早呑込みをしては、左様そうじゃないのだよ、あの座敷
 も建直すことは建直すかの、それより先に始末を付けなくてはな

らないものがあるんだ」

勝「へー、違ちがえましたか、へー」

晋「そら大阪の方で子供を貰おうと仰やる方な」

勝「ウム、へ、へ、違えねえあの一件か、良うがすとも大丈でえじよ夫うぶでげす、御ご心配しんぺえなせえますな、ナニ訳アねえや直ぐ」

晋「まあ待つてくんな、其そん様に慌あわてなくても宜よい」

おいそれ者の勝五郎が飛出そうとするを引止め、高根の晋齋は懇こん々と依頼いんしました。そこで鳶頭も先生様があゝ云つて、己おらいのようなものにお頼みなさるんだから、早く両ふた児たりを片付けて上げようと存じまする親切で、直ぐ越佐さんの方へ参りまして幹とり旋もちを致すと、先方さきでも子供こが欲ほいと思つてるところなんでございま

すから、相談は直ぐに纏まとりまして、お米は越佐の養女に貰われ、夫婦も大層喜び、乳母をかゝえるなど大騒ぎでございます。さてこれで女の方は片付いたがまだ一人いるんで、勝五郎は逢う人ごとごとに子供はいらねえかと云つてますんで、口の悪い友達なんかは、

○「オイ勝ウ、手前てめえな、そんなに子供々々と己おれ達たちにいうより、

いいことがあらア」

勝「なんだ、誰か貰つてくれるんか……」

○「うんにやア、逆上のぼせていやがるなア此奴こいつは余つぽど、そんなに荷厄介するならよ、捨うちちやつて仕舞やア一番世話なしだぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

勝「こん畜生ちきしょう、手前てめえのような野郎が捨児すてごをするんだ、薄情

の頭^{ずぬ}抜けッてえば」

○「勝さん^{おこし}怒^{おこ}つたつて仕方がねえや、それじゃアお前^{めえ}売^うつて歩^あきねえな、江戸は広^{ひろ}えとこだ、買^かい^いてあるかも知れねえ、子供^{こども}や

と拳^{こぶし}をふり上げますから、傍^{そば}にいるものも笑^わつて見てもいられ
 勝「こいつが又馬鹿^{ばか}を吐^こきやがる、最^もう承^う知^ちがならねえ、野郎^{やろう}何^{なに}うするか見^みアがれッ」

と拳^{こぶし}をふり上げますから、傍^{そば}にいるものも笑^わつて見てもいられ
 ません。

△「まア何^{なに}うしたんだ、勝^{かつ}も余^あまり大人^{おとな}気^きねえじゃねえか、熊^{くま}の悪^{わる}口^{くち}は知^ちッてながら、廃^やせッてえば、下^{くだ}らねえ喧嘩^{けんか}するが外^み見^みじゃアあるめえ」

と仲裁をする騒ぎでございませぬ。勝五郎は友達が笑いものになるまでに熱心になつて、何うか晋齋の依頼たのみを果そうと心懸けて居ります。すると深川の森下に大芳だいよしと申して、大層巾のきく大工の棟梁がございませぬが、仲間うちでは芳太郎よしたろうと云うものはない。深川の天神様で通つてゐる男で頗る変人すこぶでげす。何事でも芸に秀でて名人上手と云われるものは何うも変人が多いやうで、それも決して無理のない訳だろうと思われるんでございませぬ。私わたくしどもが浅慮あさはかな考えから思つて見ますと、早い例たとえが、我々どもでも何か考えごとをして居りますときは、側で他人様から話を仕掛ひとさまけられましても精神が外ほかへ走はせて居りますので、その話が判然はつきり聞とれませんと申すやうなもの、そこで御挨拶がトンチンカンと

なる。そうすると彼奴あいつまだ年も若いにもうろく耄碌しやがツたな、若耄碌なんかと仰やるような次第でげす。一寸ちよつといたしたことが之れこでございますから、物の上手とか名人とか立てられる人は必ずその技芸に熱心している／＼の工夫を凝らしているもので、技芸に精神を奪われていきますから、他の事にはお留守になるがこりや当あたりまえ然なの道理でござりましょうかと存じます。それで物事に茫ぼんや然りするように見えるんで、そこで変人様の名も起る訳であろうかと推量もいたされるでげす。大芳棟梁も矢張やはりこの名人上手の中うちに数えらるゝ人ですから、何うも一風流變つておりますが、仕事にかけたら何んな大工さんがど鯪しやちほこだち鉾立かして張り合つても叶かないません。今では人呼んで今甚五郎と申す位の腕前でございます。そ

れほどのお人ですから弟子は申すまでもなく多くある。何処どこの棟
 梁手合でも大芳といえは一目もくも二目もおおているほどで、江戸中
 の大工さんで此家こゝへ来ないものはない。そんなもてはやに持もて囃はやされて居
 りますが大芳さん少しも高慢な顔をしない。どんな叩き大工が来
 ても、棟梁株のいゝ人達てあいが来てもおんなしように扱あつてゐるんで、
 中には勃然むっとする者もありますが、下廻りのものは自分達を丁寧
 にしてくれる嬉しきからワイ／＼囃あしています。この人の女房は、
 柳やなぎ橋ばしで左ひだり褌づまとつたおしゆんという婀娜物あだものではあるが、今
 はすつかり世帯染しよたいじみた小意気な姐御あねごで、その上心掛しんかけの至極いゝ
 質たちで、弟子や出入ではいるものに目をかけますから誰も悪あくいうものが
 ない。一家まことに睦むつましく暮くしています。子供こどもというものが一

人もないにおしゆんは大層淋しがって居るんで、大芳さんも好児があつたら貰つて育てるが宜いと云つてる。或日でござります。

大芳棟梁の弟子達が寄つて頻りに勝五郎の噂をしているのを姐御のおしゆんがちらりときいて、鳶頭の勝さんなら此家へも来る人、そゝつかしい人ではあるが正直な面白い男、そんな人が肩を入れてる子供なら万更なことはあるまいと思ひますので、大芳さんに此の事をはなすと、

大「お前が好いと思つたら貰いねえな、何うせ己が世話するんじゃないから」

と云うんで、おしゆんは直ぐ弟子を勝五郎の家へ迎えにやる。

勝五郎は深川へ来て話をきくと雀躍して喜び、伊之吉もまた大

芳のそこへ貰われて来ましたが、実に可愛らしい好児でげすから、
 おしゆんさんは些とも膝を下しません。それ乳の粉だの水飴だの
 と云つて育てゝ居ります。伊之吉もいつか大芳夫婦に馴染んで片
 言交りにお話しをするようになって、夫婦はいよく可愛くなり
 ますが人情でござります。只だ伊之やくとから最う氣狂のよ
 うで、実の親でもなか／＼斯うは参らぬもので、伊之吉はまこと
 に僥倖しあわせものでげす。高根晋齋は勝五郎の世話で両児ふたりを漸う片附
 けましたから、是れよりお若の身を落付けるようにして遣ろうと
 心配いたして、彼方あつちこつち此方へ縁談を頼んでおきますと、江戸は広い
 とこでげすから、お若が狸の伊之と怪しいことのある程でござい
 ますに、嫁に貰おうと申すものが網の目から手の出る程でござい

が、当人のお若は何うあつてもお嫁に行くは嫌だと申し、いつかな受けひきません。晋齋もいろ／＼勧めて見ますが何うも承知しないんであぐねております。するとお若は世を味気なく思いましたやら、房々ふさくした丈たけの黒髪根元からプツ、リ惜気おしげもなく切つて仕舞いました。

三

我身わがみの因果を歎かこち、黒髪をたち切つて、生涯を尼法師で暮す心を示したお若の胸中を察します伯父は、一層に不愜ふびんが増して参り、あゝ可愛そうだ、まだ裏若い身であんなにまで恥ているは……あゝ

これも因縁よきづくだ、前の世からの約束ごとだから仕方がない、と晋齋もお若のするが儘にさせておきました。その年も何時いつしか暮れて、また来る春に草木くさきも萌え出いだしまする弥生やよい、世間では上野の花が咲いたの向島が芽ぐんで来たのと徐々そろく々騒さわがしくなつて参ります。何うもこの花の頃になりますと人間の心が浮いて来るもので、兎角に間違まちがひの起る根ざしは春にあるそうでございます。殊に色事の出入でいりが夏の始めから秋口にかけて多いのは、矢ツ張り春まいた種が芽をふき葉を出して到頭世間へパツとするのでもござりましたようか。能く気を注つけて御覽遊ばせ。まア左様そうした順に参つております。これは私わたくしが一箇いつこの考えではござりません、統計学をお遣り遊ばした御仁は熟知よくつてお出いでなさる事で、何も珍しい説

でも何でもなんないんでございます、と申すと私も大層学者らしい口くちぶり吻ちぶりでげすが、実は何うもはやお恥かしい訳なんで、みんな御鼻ばな屑くの旦那方から教えて頂く耳学問、附焼刃ばけでげすから時々ばけ化ばけの皮はが剥はげてな、とんだ面目玉を踏みつぶすことが御座いまする、ハハハハハ。扱さて世捨人せになつたお若さんでげすが、伯父の晋齋しんさいに頼たのみまして西念寺さいねんじの傍わきに庵室ゐんしつとでも申すような、膝ひざを容ゆるれるばかりな小家こいえを借かり、此処こゝへ独ひとりりで住すんで行いすまして居ゐりまする。尤も伯父おぢの家うちは直じき近くでございますから、晋齋しんさいも毎日見廻みまわつてくれるし、三食とも運運んでくれるので自分で煮炊にたきするにも及およばない、唯仏壇ぶつだんに向むかつてその身の懺悔ざんげのみいたして日を送おくつております。花はなで人が浮うれても、お若わかしは面白おもしろいこともなくて毎日勤行ごんぎやうを怠おろそか

らず後^ご世安樂を祈っているので、近所ではお若の尼が殊勝^{けなげ}なのを
 感心して、中にはその美しい顔に野心を抱^{いだ}き、あれを還俗^{げんぞく}させ
 て島田に結^{ゆわ}せたなら何様^{どんな}であろう、なんかと碌でもない考えを起
 すものなどもござりました。丁度お若さんがこの庵^{いおりこも}に籠^{こも}る様にな
 った頃より、毎日々々チャンと時間を極^{きめ}て廻^{まわ}つて来る門付^{かどづけ}の物
 貰^{もら}いがございまして、衣服^{なり}も余り見苦しくはなく、洗いざらし物
 ではありませんが双子^{ふたご}の着物におんなし羽織^{ひっかけ}を引掛^{ひっかけ}け、紺足袋^{こんあしぶくろ}に麻
 裏草履^{うらぞうり}をはいております、顔は手拭^{てぬぐい}で頬^ほかぶり冠^{かぶり}をした上へ編笠^{あまがし}を
 かぶつてますから能くは見えませんが、何^{なん}でも美男^{いゝおとこ}だという評判
 が立ちますと、浮気^{うけ}ツぽい女^めなんかはあつかましくも編笠^{あまがし}のうち
 を覗^{のぞ}き、ワイ〜という噂^{うわさ}が次第^{しだい}に高くなつて参り、顔を見よう

というあだじけな心からお鳥目を呉れる婦人が多いので、根岸へ来れば相応に貰いがあるから、それで毎日此方こつちへ遣つて参るといふような訳になる。物貰とは申しますが、この美男はソツと人の門口に立つてお手元は御面倒さまなどは云わないんで、お鳥目を貰う道具がござります。それは別に新発明の舶来機械でもなんでもないんで、唯一挺の三味線と咽喉のどを資本もとの門付という物貰いでござりますが、昔は門付と申すとしんない新内に限つたように云いますし、また新内が一等いゝようでげすが、此の男の謡うたつて来るものは門付には誠に移りの悪い一中節ですから、裏うらだな店小店の神さん達が耳を喜ばせることはとても出来ませんが、美男と申すので惣そうざい菜のお銭あしをはしけて門付に施すという、とんだ不了簡

な山の神なんかゞ出来て、井戸端の集会にも門付の噂が出ないこ
 とがないくらい。斯ういう不心得な女が多くまおとこ姦通なんかという
 道ならぬことを致すのでございましょう。一中節の門付はそんな
 ことには些ちつとも頓とんじやく着ちやくはしませんで、時間を違ちがえず毎日廻まわつて
 まいり、お若さんの閉籠とじこもつている草庵そうあんの前に立つて三味線弾
 くこともありますが、或日の事でございしました、お若さんが生垣
 のうちで掃除をして居りますと、件くだんの門付は三味線を抱いっつもえて例の
 通り遣しきつて参り、不審そうに垣の内をのぞきこんで、頻しきりと首を
 かたげて思案をいたして居りましたが、また伸上のびあつて一生懸命に
 見ています。此方こちらのお若はそんな事は少しも知りませんで、セツ
 セと掃除おわを了り、ごみを塵取りに盛りながら、通りの賑にぎやかなのに

気が注ついてフイト顧みかえ盼りますと、此の頃美男びなんと評判のはげしい一中節の門付が我を忘れて見ておりますから、尼さんにこそ成つていますものゝ未だ年も若く、修業の積んだ身というでもありませんから、パツと顔に紅葉もみじを散らし、そうく々庵室に逃げこみました。左様そうすると門付も立去つたらしく三味線の音色が遠く聞えるようになりまして、お若の尼はドキン／＼とうつ動悸どうきがやつと鎮まるにつけても、胸に手をおき考えれば考えるほど不思議で堪りません。何うも訝おかしいじゃないかあの門付、あんなに私を見ているといふは訳がわからない、此方こちうらの気のせいかな知らんが、顔立とよい年格好といふ伊之助さんに悉そっくり皆なんだから、イヤ／＼左様そうであるまい、あの人があんな門付に出るまで零落おちぶれするということ

はない筈、あゝ怖^{おそろ}しやくゝ又も狸か狐にだまされた日にやア、再び伯父様に顔合せることが出来ないというもの、それにしても訝しい、あの時は此方^{こつち}で伊之さんの事ばかり思つていて逢^{あいた}度々々とそればかりに気を揉んでいたから、畜生なんかに魅入られたんだけれど、今度はそうでない、私も心に懸らない事はないが、あゝいう事があつては、伊之助さんも愛想をつかしたろうと諦めちまつたから、些^{ちつ}ともそんな気はないに、今日のあの門付、何う考えられても不思議でならない、と悶え苦しんで居りましたが、あゝ左様^{そう}だ、仮令^{たとえ}どんな者が来ようと身を堅固にしていさえすれば恐いことも怖しいこともない、若し^も明日^{あした}来たら疾^とくと見てやろう、此方^{こちら}からお鳥目でもやる振^{ふり}をして、と待つておりましたが、丁度

その時刻になりますと、チンツンチンという撥あたりで三味線の音が聞え、次第に近く成つて参りました。あゝ来たなと思ひますから、お若さんはお捻をこしらえ待つております、例の門付は門口にたつて三味線は弾いておりますが唄はうたいません、上手な師匠がやつても何うも眠氣のさすが一中節でげすから、素人衆……エー旦那方が我れ面白の人困らせ……斯ういうことを申しますと暗の夜がおつかないんでげす。ナニあの野郎生意氣をいいアがつて、向う脛ぶつぱらえなんかと仰しやるお氣早な方もございませう、正直に申すとまア左様言つたようなもので、扱て門外にたちました一中節の門付屋さんでげすが、頻りに家の内をのぞいて居ります。お若もこのようすが如何にも訝しいと思ふんで障子

の破れから覗いております、其の中門付屋さんは冠かぶつてまする編笠かぶに斯う手をかけまして、グツとあげ、家うちを見ますときお若さんは顔をはつきり見ました。すると驚いて障子をがらり開けたんで、門付屋も恟びっくりして顔を隠しまする。

若「もしやあなたは伊之助様じゃなくって」

伊「そう仰しやるはお若さんでげすね、何うしてそんな風におんななされました」

若「まあお珍らしい、貴方こそ何うしてそんな事を遊ばしまするのでござります」

伊「これには種いろく々の理わけ由があつて……今じやアこんなお恥なりかしい形なりをしていますよ、あなたこそなんだつてお比丘びくさんにはお

成んなさつたのでげす」

若「私にもいろんな災難が重なりましてね、到頭斯ういう姿になりましたんですよ、それじゃア私がとんだ目にあつた事をまだ御存知ないんですか」

伊「些ちつとも知らないから、実に恟ちつりましたよ」

若「おやまア左様そうですか、此処こゝには誰もいないんですから遠慮するものはありません、お上あがりなさい」

とお若さんは伊之助を奥へ引張りあげました。段々様子をきいて見ると、お若が狸を伊之助と心得て不所存をいたしたことも知らぬようでげす、初めは私に気の毒だと思つてシラを切つているのだらうと思つてましたが、何うも左様でないらしいとこがござ

いますから、お若さんは根どい葉どいを致す、伊之助もきかれて見れば話さない訳にも参らぬところから、

伊「エー斯うなんですよ、あのお前さんとの一件がばれたんで、
かしら鳶頭から手切の相談さ、ところで私わしもダヴを捏こねようとア思ったんだが、イヤ／＼左様でない、私ら風情たいけで大家じょうさんの嬢様と一緒
 になろうなんかツてえのは間違まちがっている……こりやア今切れた方が先方さきさま様のお為と思つたもんだからね、鳶頭の言うなり次第ふたつきになつて目を眠ねつていたんで、その後のちのことで……左様ささ二二月も経つてからだツたでしょうよ、鳶頭あわが慌あわてくさツて飛びこみ、私がお前さんのいなさる根岸へ每晚忍んで逢ゆいに行くてえじやないか、あんまり馬鹿々々しいんで鳶頭をおいやらかしてやツたん

でげす」

と云われてお若は深く恥いりましたか、俄にわかに真赤まっかになつてさし俯うつむいております。伊之助はそんなことは知りませんから、

伊「ほんとにあの鳶頭のあわてものにも困る……」

と一寸ちよいとお若を見ますると変な様子でげすから、伊之助も何となく白けて見え、手持無沙汰でありますので、お若さんようよも漸う気が注ついて、

若「それはそうとして何うして其様そんなことを……」

伊「イヤ何うも面目次第あくるひもない、恥をお話し申さないと解らな
いんで、丁度あの鳶頭が来た翌あくるひ日ひでした、吉原なかの彼女やつと駈落かけおち
と出懸けやしたがね、一年足らず野州やしゅう足利あしかげで潜んでいろうち

に鼻かゝあは梅毒がふき出し、それが原因もとで到頭めでたくお目出度なつちまつた
 んで、何時いつまで田舎くすぶに燻くすぶつてたつて仕方がねえもんだから、此方こつち
 へ歸りは歸つたものゝ、一日でも食はずに居られねえところから、
よんどこ掘よんどころないこの始末、芸が身を助けるほどの不仕合とアよく云う口
 ですが、今度はつく／＼感心してますよ」

若「それはくさぞお力落し、御愁傷さまで……」

伊「悔みをいわれちや、穴へでも這へえ入りてえくれえでげすが、
 それにしてもお前さんこそ何うして其様そんなお姿におなんなすつたん
 ですえ」

場数ふんでまいつた蓮葉はすっぱ者はものでございましたなら、我が身の恥は
 辱じはおし包んで……私わしは一旦極めた殿御にお別れ申すからは二度

と再び男に見えぬ所存で……これこの通り仏に誓う世捨人になりま
した、伊之さん何うか察して下さいとほろりとさせる処でげすが、
其様な手管などは些ともないお若さんですから、実は斯々
かくくしか、云々、の訳あつてと眞実を話します。伊之助も恟り仰天い
たして、暫らくの間は口も利きませんでした、それも矢つ張り
因縁というものでしょうから心配なさることはないと慰さめ、此
の日は何事もなく帰ります。次の日もまたお若さんの家へ寄つ
て行く、その次の日もまた寄るといふようになる、お若さんも
元々厭な者が来るんでないから其の時刻を待つ、伊之助も屹度来
る、何時何ういう約束をするといふでもなく、何方から言出すと
いふでもなく、再び焼棒杭に火がつくこと、相成りました、

扱さてこれからは何うなりましようか、一寸ちよいと一服いたし次席でたつぷり申し上げましよう。

四

さて引続き申上げております離魂病のお話で……因果だの応報だのと申すと何なんだか天保度のおはなしめいて、当今のお客様に誠に向むかきが悪いようではげすが、今こんにち日だつて因果の輪りん回ねしないという理由わけはないんで、なんかんと申しますると丸で御法談でも致すようで、チーン……南無阿弥陀仏といたくい度なり、お話がめいつて参ります。と云つてこのお話を開化ぶりに申上げようと思つて

も中々左様はお喋りが出来ません。全体が因果という仏くさいこと
とから組立られて世の中に出たんでげすからね。何も私が好この
んで斯様なことを申すではありません。段々とまア御辛抱遊ば
して聴いて御覧じろ、成程と御合点なさるは屹度お請合申します
る。エーお若伊之助の二人は悪縁のつきぬところでござりましよ
うか、再び腐れ縁が結ばりますると人目を隠れては互に逢引をい
たす。お若さんの家は夜分になると伯父の晋齋が偶さか来るぐら
いで、誰も参るものはございません、尤も当座は若いお比丘さん
独りで嘸お淋しかろうなぞと味なことを申して話しに押掛けて参
った経師屋もないでもなかつたが、日が暮れると決して人を入
れないので、左ほど執心して百夜通いをするものもなかつたん

でしょう。只今も申します通り夜分になれば伯父の目さえ除よければ憚はげるものはないんでげすから、お若さんも伊之助も好い事にことして引きいれる、のめずり込むというような訳になつて……伊之助は大抵お若さんのとこを埒ねぐらにしておりました。始めのうちこそお互いに人に見られまいと注意いたすから、夜が明けはなれると伊之助は飛び出すので、近所でも知らなかつたが、左様都合のいゝことばかりはないものでな。惚ほれた同士が二人きりで外ほかに誰もいないのでげすから、偶たまには痴話や口説くぜつで夜更しをして思わぬ朝寝もしましようにし、また雨なんか降るときはまだ夜が明けないと存じて、

伊「もうおきる時分だろう、雨戸のすき間があかるくなつて来

た」

若「ナニまだ早いよ、大丈夫だから……お月夜であかるいんだわ、今から帰らなくツてもいゝツてえば、私アねむくつて仕様が
ないじゃないかね、モガくおしでないてえば」

とお若が起しませんから、伊之助とて丁度寝心のいゝ時節、飛
起きたくはありますまいて。すると……、毎朝照つても降つても
欠かさずに屹度きつと参る納豆屋の爺さん、

納「納豆ーなつとー……お早うさまで」

若「おや大変おそいよ、納豆やの老爺さんが来るようでは……
とんだ寝坊をしたね」

伊「それ御覧な、仕様がなないじゃないか、伯父さんのところから

御飯でも持つて来る人に見付みつかつちやア大変だ、近所の人は皆みんなな起きてるだろう……あゝ弱つたね、本ほん当とに困つちまつた」

若「私だつて全く夜が明けないと思つたからだわ、何うするの伊之さん……今日は此家こゝにおいでな、こんなに雨が降つてるから伯父様さんも来やアしまい、お前だつたつて帰るも大変だわ」

伊「そりや己おひらの方にやア願つたり叶つたりだけれどな、若もし来られた日にやアそれこそ大変なわけ、一旦手切まで貰つて分れたんだから」

若「それも左様そだねえ……中々頑固だから六ヶ敷むずかしいことを云うかも知れないから、困つたね」

と云つているうちに伊之助は起あがりて帯を〆《し》めており

ますると、表をトン／＼と叩くものがございますんで、二人は恟りびつくいたして、お若さんは手早く床をあげ、伊之助を戸棚へ隠し、やつと心を落付け、表の戸をた／＼くを聞えぬ振して態わざと縁側の戸をガラ／＼明けております。表では頻しきりにトン／＼／＼と叩いて、

吉「オイお若さん何うしたんだい、こんな寝坊することがあるもんか、早く開けて下さいよ」

若「おや吉よしぎわ澤さんですか……何うも御苦労でしたことねえ、今朝はとんだ寝坊をしましてねえ……大層おた／＼かせ申しましたか、ほんとにすみませんこと」

吉「ハ、ア珍らしいですな、あなたがこんなに朝寝をするは……」

…ハ、ハ、ハ、」

いつも例の通り飯櫃おほちと鍋を置いて帰ったので、まあ好よかつたど胸なで

おろ

下しまして、それから伊之助も戸棚より這出して参り、直ぐに帰

ろうというを、お若は丁度あつたかい御飯が来たところからと、

無理に止めまして少し冷めた味噌汁おみおつけをあつため、差向いで朝あさは

飯んを仕舞まする。

若「伊之さんこんなに降つて来たから…大丈夫来やしないわ、
帰るにしても些ちっと小止こやみになるまで見合みあしてお出いででないとビシヨ濡
になつちまうわ」

伊「まさか此の降りに伯父様さんが見廻りもなさるまいとア思うが

ね、あんな人ではあるし、今朝来た使いが変だと思やアそう云う

だろうから油断はしてられないよ、見付みつかつて仕舞つてから幾ら悔しがつても取つて返しが付かないから」

若「そうねえ」

とは申しますものゝ、ドシ／＼雨の降つてる最中に可愛い情夫おとこを出してやるは、何うも人情仕し悪いものでございまずんで、お若さんは頻りに止めますから、伊之助もそれではと小歇こやみになるまで見合すことにいたし、立膝をおろして煙草を吞もうといたすと、
「ギア／＼／＼」という音が庭でするは、丁度傘をさして人の立たってゝもいるように思われますんで、疵もつ足の二人は驚きあわて顔見合せましたが、がらりと障子をあげて誰が来たと確めることが出来ません。そうかと申して伊之助が今逃げ出してはます／＼

疑われる種とおもいますから、うかといたした事をして毛を吹いて疵を求めるも馬鹿々々しいと、只二人ともはらくと胸を痛めて居りますと、暫くして縁先で咳ばらいをいたすものがある。お若も伊之助も最^もう堪らなくなりましたから、先^まず伊之助が逃げ出しにかゝるを、

○「二人とも逃げるにやア及ばねえ」

とがらり障子をあけて這入ってまいったは別人ではございません、そゝつかしやの鳶頭勝五郎とびがしらでげすから、ハツと驚きましたが、まだしも伯父の晋齋でないだけが幾らか心に感じ方が少ないと申すようなものではあるが、何なんにいたせ二人とも面目ない始末……とんだところへと赤面の体ていで差しうつぶいて居ります。勝五郎も

驚きましたね、まさか伊之助が此処へ来ていようとは夢にも思いませんから、暫くはじろり／＼二人の様子を見ておりましたが、勝「師匠……いやさ伊之さん、まア何うしたんだ……何うして此処に来てゐるんだ」

と申して膝を伊之助の方へすゝめますが、何とも返答をいたす事が出来ないんで……矢ツ張黙つてモジ／＼と臀ばかりを動かす、まるで猫に紙袋かんぶくろをきせましたように後あとずさりをいたしますんで、勝五郎は弥々いよ／＼急せきたちまして、

勝「エ、何うしたんだな、お前さんがこんな戯ふざけた真似をしちやア済むめえが、お前さんばかりじゃねえや、私が第一でえいちお店たなに申訳がねえ、手切金までとつて立派に別れておきなながら……何て

えこつたアな、オイ伊之さん何うしたんだ」

と今にも掴つかみかゝらんとする権幕でげすから、お若さんも恟びつくり、黙もくつていられません。

若「鳶頭かしら、そんなにお云いでないよ、伊之さんが悪いんじゃないよ、いから、これというも皆みんなな私の心から無理に伊之さん呼びこんだのだよ、何うした因果か知らないが、何うも伊之さんのことばかりは思い切ることが出来ないんだからね」

勝「へエーお嬢さんから、野郎を引ずり込んだと仰しやるんでげすか」

若「お前さんでも貞婦ていふ両夫に見まみえずということがあるは知つてるでしょう、私そだつて左様さうだわ、一旦伊之さんとあんな交情なかにな

つたんだもの、世間の義理で切れましようと言つたつて、心から底から切れるなんかツてえ気は微塵もありやアしないのさ、ひよんなことがあつたからね、これでは伊之さんに邂逅めぐりあつても愛想をつかさされるだろうと悲しく思つてるを、伯父さんは些ちつとも察してくれず、お嫁にゆけのなんのというじゃないか、私の良人は三おつと千世界に伊之さんより外にないんだものお前、仮令たとえ嫌われたつて愛想をつかされたつて、二人の良人は持ちますまいと心に定めてこんな姿になつてるんだからね」

勝「こりや驚きやした、手放しの惚気のろけてえのア、じゃア何なんです
ね、お嬢さんは野郎を引ずり込んだツて好いいと仰しやるんでげす
ね」

若「あれまア、引摺りこんだなんて、そんな体の悪いことをお云いでないよ」

勝「だつて左様そじやげせんか……、これが伯父さんに知れたら何うなさる御了簡でげすえ、伊之さんお前めだつて左様じやねえか、いくらお嬢さんが何なんと仰しやるにしろよ、ノメく這へ入りこんでそののかすてえことはねえ筈」

と鉾先は伊之助に向きます。

伊「鳶頭かしらまことに面目ない……、私もお若さんが尼になつていなさりようとは思ひもかけず、此こ処ところらをうろつくうちにお嬢さんが伊之さんかというような訳から、段々と様子をきいて見れば私風情みさおに操さをたて、下さるお志が何うも知らぬと申しにくく、鳶頭

の前だが誠に申訳のない次第」

勝「なんだツて、エ、お前めえまでが一緒になつて惚のろけるてえこと

があるもんか、コウ伊之さんよく聞きねえ、私わっちアお前さん方の為

を思つて飛とんで来たんだ、今日雨降りて丁度仕事かねえから先生の

とこへ来てるとよ、書生さんが此こゝ処から帰けえつて来て、お若さんの

とこには泊とまりきやく客があるらしいと云つたを、先生がきいて、若い

女のとこへ泊客たア捨ておかれん、己が直ぐ往つて実じつ否を正して

来ると支度をするじゃアねえか、私アまさか伊之さんが来ていよ

うとは思わねえけれど、お嬢さんだつてまだ若い身そらだ、若もし

ひよつとどんな虫が咬かじりついたか知れねえと思つたからよ、ナニ

旦那がいらつしやるまでもねえ私が見届めえけて参りますから……来

て見ればこれだからね実に悔びつくりしたじゃねえか、エ、これが若し

旦那に來られて見ねえ何様どんな騒ぎになるか知れたもんじゃねえ」

と云れてお若たちまは忽ち震たいあがりましたが、態わざと落付きはらつて、

若かしら「鳶頭後生だから、伊之さんの來ていることはねえ、私が一生のお頼みだから」

勝「エ、そりやア宜ようがすがね、困こツちやうなア、切れろツて云つたつて此の様子じゃアとても駄目だ、これが何時いつまでも分らずにいりやア私わっちも知らん顔していやすが」

伊「鳶頭そ頭うまア左様云わずと何うかね、今日のところは見逃さしておいておくんなさい、私もまたお嬢さとさんをお諭さとし申して綺麗さつぱり諦あらめるようにするからねえ、決してお前かおさんの面は潰つぶさない

から」

というくと勝五郎をすか賺しこしらえるうちに、切れるような言葉あるをきゝましたお若は、プツと頬をふくらすのを見ましたから、眼付で合図いたし、ヤツと勝五郎を追いかえしますると、

若「伊之さん何うしようねえ、この事が伯父さんに知れた日にやア大変だから」

伊「さア何うしたら宜かろうか知らん」

若「いつその事、私をつれて逃げておくれでないか」

伊「そんな事をしては猶更すまねえから」

若「あれさ、此様こんなことになつて、済むのすまぬということがあるものかねえ、私がこんな形なりだからお前さん外聞がわるいんで」

伊「ナニ其様そんなことはないけれど、斯うして来ているのさえ面目ないのだに、其の上また連出しては」

若「嫌いやなんだね、嫌ならいやでいゝよ、お前さんに捨てられちやア」

と突然いきなり仏壇の引出から剃かみそり刀を取出し自害の体に見えます。

お芝居などでもよく演やるやつでございませうが、先まず初めにお姫さまが金魚の糞うんこほどぞろぞろ腰元をつれ、花道で並び台詞ぜりふがすみ、

正面の床かあるは引廻したる幔幕まんまくのうちへ這入る、そうするといろやつこ色 奴とか申してな、下司げす下郎げんざいの分際ぶんざいで金糸きんしの縫いあるぴか

くした衣装で、お供おくに後れたという見得みえで出てまいります、舞ぶ台だいへ来ても最もうお姫様もお供の影もないのでまごころしているを

好^い寸法に出来てるもので、お姫様が其^{そこ}処へたつた一人で出懸けて
まいり、これ何平とやら雨の降るほどやる文を返事もしないは情^{つれ}
ないぞや、四^{あたり}辺に幸い人はなし、今日こそ色よい返事をなんか
ツて……あつかましくもジツと下郎の側へ寄り添い、振袖を肩の
ところへかけるを合図に、下郎は飛びのき不義はお家の御^ご法度、
とシラ／＼しく言えば、女の身で恥かしいこと言い出して殿御
に嫌われては最うこれまで、と懐劍ひきぬき自害の模様になるを、
下郎は恟^{びつく}りして止めると、そんなら私^{わらわ}の望み叶えてたもるか、さ
アそれは……叶わぬならば此の儘、さアくくくと糶^{せり}詰^{つめ}た後^{のち}は
男がそれまでに思召すのをなどと申して、いやらしい振になつて
騒ぎを起しまするが、女の子が男を口^{くどく}説秘法は死ぬというが何よ

りてきめん面めでげす。併しかし当いま今の御ご婦ふ人にさま方はにはそんな 迂まわりどお遠とほい
 ことを遊あそばはす方は決きましてございますまい、ナニ惚おぼれたとか腫はれたと
 か思おもいますと直じき々くにあつて御ご覧らんなさる。先さ方の男が諾うんといえば
 自由じゆう結けっ婚こんだなどと吹ふ聴きあそばし、また首かぶりをふればナニ此こ処こゝな青瓢ひょう
 箆へい野の郎らう、いやアに済すしていアがる、生せい意い気きだよ、勿なくも私わたしの
 ような茶ち人にんがあればこそ口くち説せつもしたのさ、一いつ生せいのうち終り初物で
 悔くりして戸迷とまいしあがつたんだらう、ざまア見あがれと直ちぐ外の
 男おとこへ口をかけるというように淡たん泊ぱくになつて参まりました。これはは
 や何なにうも飛とんでもない事を申しまして、本ほん書しよをお読よみなさる御ご婦ふ人に
 様さま方はには決きましてそんな蓮れんツ葉な、薄はく情じやうきわまるお方はお一ひと人でも
 ある気遣ぢいはございません。この本ほんを見たこともないと申す阿魔ま

や山の神には兎角そんな族やからが往々あつて困りますよ、ハ、ハ、ハ、。何うも余事にわたつて恐れ入りました。扱さて伊之助でございますが、お若さんが連れて逃げてくれると申しましたを、義理だてをして扱はか々々しく相談に乗らないところから、男を諾うんといわする奥の手をだし、自害の覚悟を示したのでありますから、伊之助も最もう是非がございませぬ。

伊「えい危ない、何なんだつてそんな真似を、まアこれをお放しなさいよ、はなしは何うにでもなることだから」

若「いゝえ、お前さんは私に飽きたから、それで」

伊「これさ、まアそんな強情をいわずと、あゝ困るなア、あゝまた、危ないゝ、逃げろなら逃げもするから、まア刃物はお放

しなさい」

若「それでは屹度きつとだね、屹度一緒に逃げておくれだねえ、屹度

……屹度」

伊「あゝよろしい、仕方がない、逃げますともく嘘をつくも
んですか」

と漸ようようお若を宥なだめましたんで、ホツと一息つき、それでは手に
手をとつて駈落と相談は付けたものゝ、たゞ暗やみくも雲こちらに東京をつツ
走つたとて何処どこへ落著おちつこうという目的めどがなくてはなりません、お
若と伊之助はいろくくと相談をしますが、何うも頼みにして参る
人がない、ハテ困つたものであるが、誰か親切らしい人はないも
のかと二人とも無言で頭をなやまして居ります。そうすると伊之

助は莞爾にっこりいたして、

伊「いゝ処とこがありますぜ、東京こちらから遠くはありませんがね、私わしが行つて頼たのんだら情すげなくも断ことるまいと思おもうんで、あれなら大丈夫だいじゆうだろう」

若「そう何処どこなの、お前さんの知しつてる家うちならいゝけれど、余あんまり近いと直ただぐ知しれツちまつてはねえ、何処どこ、何処どこなの」

伊「ナニ知しれる気遣きぢいはない……鳶頭とんずだつて知しつてる筈はずはなし、伯父おぢいさんだつて猶なほさら御存知ごぞんちの気遣きぢいはないところ、あゝ好いところを思おもひ出した」

若「お前さんばかり、好いところだ〜と言いつて、一体いっどこなんだねえ」

伊「何処うちツてえでもねえが、私が子供わしのころに里にやられていた家で、今じやア神奈川の在にはいつて百姓ひやくしやうをしているんさ、まア兎も角もそこに落著おちいて、それから緩ゆるり相談さうだんすることに仕つかましようよ」

若「おや左様さようなの、お前まへさんの里に行つてた家、じやアその人は余程よつほどのお婆おばさんになつてるだろうね、こんな風ふうをして行くも何なんだか極ごくりが悪いけれど、外あそに頼たのむものがないんだからねえ」

伊「ナニさ、心配しんぱいしなさることはないよ、爺おやい婆おばアの二人暮ふたりぐらししているんだから、私が頼たのめば一時いちじは小言こごをいうかも知れないが、憎にくいとは思おもうまいから何なんうにか世話よちわをしてくれるよ」

若「そうかねえ、それでは其処そこへ行くゆことに仕つかましようが、今

から直ぐ二人で此処こゝを出ては人目にかゝつてよくないがね、何うしよう」

伊「ひるひなか昼日中二人で出てはいけない、今夜の仕舞汽車で間にあ

うように、そして横浜まで落延びておいて、明朝あす一緒に往ゆこう」

若「あゝ、だけれど先方さきで嘸さびつくぞ悔りするだらうね、まあお前まへさ

ん何なんてツて往くつもりなの」

伊「ハゝゝゝ、詰らぬ心配したつて仕方がないよ、外なんに何とも

言いいかた方がないじゃアないか、矢ツ張り駈落をして来たというより

仕様がないのさ」

若「ホゝゝゝ、何なんだか極りが悪くつて」

と相談は極りましたから、それでは今夜と伊之助は分れて根岸

を出てまいります。お若さんは今夜駈落を為しようというんですから、そわ／＼して手荷物の支度をしてお在いでなさる。すると丁度お昼すぎに伯父の晋齋がぶらりと遣やつて参つたんで、お若さんはギョツとしました。今朝鳶頭に伊之助の来ているところを見付けられたあとですから、てつきり伯父が私の様子を見に来たにちがいない、鳶頭がまさか明あからさま白あからさまに伊之さんの来ていたことは言いもせまいとは思いますが、若もしひよつと伯父さんに言つたので来たのではないか知らん、何なんにしても悪いところへ来たと変な顔をしております。晋齋は朝の様子をきいたのだから聞かぬのだから分りませんが、常にかかわらず莞爾にこくはして居りますが、何うも腹のうちに憂いのあるらしく思われますは、眉のあいだに何なんとなく雲でもかゝ

っているように、うるさいという風が見えるので、お若さん一層の心配でたまりませんから、お腹なかの中ははらくとしてひつくりかえるようです。それを見せてはならぬと十分に注意は為なさいまするが、なか／＼見せずにおくと申すことは出来ないもので、余ッぽど偉い人でなければ喜怒哀楽を包み隠していることは出来ないそうですから、晋齋も素振おっの訝おつなのに心はついて居りましたが、がみがみと小言を申したりなんかすると間違しいでも仕出来でかさんに限らないと、物に馴れておいでなさるお方わさでげすから、態わざと言葉づかいも和やわらかに、

晋「お若、なんだ片付けものを始めたのか、ハ、ハ、ハ、如何いかに世捨人になっても女というものは、矢つ張りそんな事をいたして

おるか、こんだは大分頭だいぶんむりも生えたようだな」

お若は伯父の底気味わるい言葉にハツと思つて胸はおどりましたが、覺さとられまいと態さとと何気なく

若「昨日きのうから剃すりましうと思つてるんですけれど、何なんだか風邪氣かぜのようですから、本ほん当とに汚けならしくなつたでしう」

晋「感か冒ぜをひいたか、そりや大だい切じにしないと宜いしくないよ、感か冒ぜは万病ばんびょうの原もとと申まをすからの」

若「はい有難ありがたうございます」

晋「今日けふはの些ちつとお前に相談さうだんすることがあつて来たのだから、
まア此こゝ処ちゝへ来きなさい」

と申まをされていよく心配しんぱいでなりません。さては勝五郎かつごろうが喋しゃべつた

にちがいない、こんなことゝ知ったなら伊之さんと直ぐ駈落をしたもの、まさか伯父さんに言付けはしまいと思つてたはとんだ油断だツた。まだ何事を言われるか知れもしないうちから、お若さんは勘ぐつて、モジ／＼していなされたが、伯父の晋齋が此処へ来いというのでげすから、出ずには居いられませんので、おず／＼晋齋の前へ手をつき、

若「伯父さん改まつて何の御用でござりますかなん」

晋「別に改まつて申すほどの事でないが、今日私わしのうちに高德な坊さんがお出でなさるから、お前にもお目にかゝらせようと思つて迎いに来たんだ」

と云われてお若は当惑いたしました。今夜は駈落をする筈で伊

之助と手筈がきめてあるんですもの、何うかして断りたいといろくくなんに考えましたが、即座により智慧は出ませんから、ますく困なんつて何とも返答をいたすことが出来ない。そうすると晋齋はじろりとお若の様子を見て吸すいかけた煙草もすいません。お若だつてそう何時いつまでも黙つては居られないから、

若「折角でございませうが、今日は御免を蒙りとうございませう、初めてお目に懸るお方に頭のこんななに生えたなりでは失礼で」

晋「イヤそれなら少しも苦しゆうない、そんな心配をするには及ばない、先方さきが俗人かなにかではなし、病中だとお断り申せば仔細しじゆはないよ、ナニ私わしから能くお詫をしてやるから、あゝいうお方のお談はなしをきいておくはお前の為だ、世捨人になつていながら恥

かしいなんかてえ事があるものか、私が連れて行かねば到底も来
そうもない、さア一緒に来なさい」

と無理やりにお若は伯父の家へ連れて行かれましたから、さア
心配で／＼堪らないは今夜の約束でげす。早く坊さんが来て帰つ
てくれないと伊之さんに済まないとそればかりに気を取られ、始
めの中は家の様子に気もつきませんでした、気を落著けて考え
て見ますれば不審でげす。それほどの珍客があると云うに平常の
如く書生ばかりで手伝の人も来ていず、座敷も取散した儘で掃
除する様子もありません。お若はだん／＼訝しくなりますので、
始めて伯父の計略にかゝつて、引き寄せられたことを覚りました。
さア大変、これでは折角伊之さんに約束したことも反故になり、

さぞ恨まれるであろう、何だか口振りが変だとは思っていたが、伯父さんも余りのなされかた、欺して私を引きよせるとはそでない成されよう、あゝ仕方がない、斯うなりやア隙を見て逃げ出すまでだが、何うか伊之さんに約束した刻限まで、あゝ何うしたら逃げ出されるか知らん、うっかりした事して押えられては仕様がなない、何うか甘く脱け出したいものだ、と頻りに考えこんでおります。伯父の晋齋も別段小言は申しませんで、只だ監督して目を離さない。これにはお若さんもほとく困りましたが、坊さんの事などは聞きもしませんし言いもしませんで、茫然鬱いでおりますと、書生は今までお若のいた庵室を片付け、荷物を晋齋のとこへ運んでまいりましたので、

若「伯父さん私の荷物を此方こちへ持つてお出でなすつて何うなさ
るの」

晋「ハ、ハ、ハ、ハ、びっく、恟りしたか、都合があつてお前は当分わし私の家うちに
おくのだよ」

若「はい」

と言つたきり何なんにも言わず、頭痛がするといつて顔をしかめま
す。晋齋も心しんちゆう中を察していると見え、心持がわるくば寝るが
いゝと許しますので、お若は褥とこをとつて夜着よぎ引つ被りましたが、
何うして眠られましよう、何うぞして脱出ぬけだしたいと只一心に伯父
の隙をねらつて居りますが注意に怠りはございません。さて伊之
助でございますが、根岸を立出たちいでましてから我が宿おといたして居

る、したや やまぶしちよう下谷山伏町じようしゆうやの木賃宿上州屋にかえつても、雨降でげすから稼業にも出られず、僅かばかりの荷物など始末いたし、お若と駈落をする支度をいたして居ります。元より所持品がたんとあるでなし、柳行李ひつ一個が身上でげすが、木賃宿などへ手荷物でも持つて参るは上々のお客様で、上州屋でも伊之助を大事にして居りましたが、日の暮たばかりの七時ごろ上州屋の表へ一輛の人力車がつきますと、手拭あねさんを姉様かぶりにした美婦人が車を飛び下り、あわてゝ上州屋へはいり、

女「あの此方こちらに伊之助さんと仰しやる方は在いらつしやいませうね、今もおいでになりますか」

宿「ハイ、お在になります」

女「あの根岸から尋ねて参つたと、左様そうお願い申します」
と云うも精一杯で真赤まっかになる初心うぶな様子を見て、上州屋の帳場ではじろくとながめ、急に呼んではくれません。

五

一寸ちよいと往来でゞもそうでございます、若い綺麗な婦人ゆきあに行会いますと振返りたくなるが殿方の癖で、殊じやに麝香じやこうの匂いがプーンと致しては我慢が出来にくいものだそうで、ナニ己は婦人などに眼はくれぬ、渠かれは魔である化物であるなんかと力んでいらッしやる方もありますが、その遊そつばすことを窃そつと伺つて見ますると矢ッ

張り人情と申すものは変りません、横丁を曲るときに同伴つれに気の付かないように横目でな、コウいう塩梅しきにじろりとお遣り遊やばしますから、さて不思議に出来あがってるもので、まア近い譬たとえが女嫌いめがいと名をとつてお在遊いでばす方が、私の参るお屋敷うちにございます、御婦人のお話や少し下しもがかつたお話になるとフイと其の方のお姿が消えて仕舞うくらいでげすがね、余り大きな声あんまでは申されませんが、それでね、若い御新造をお貰いあそばし、年と子をつゞけさまにお産し遊ばすから、私もある時御機嫌うかゞいに出で、旦那様は予かねて御婦人かぎらいと承わり、女は悪魔だと仰しやつていらつしやるそうですが、お子様は最もうお三方おありなさいますね、と入らざるおせつかいを申しますと、澄したもんで、

ナニサ乃公おれは大の女嫌いだよ、併しかし鼻かアは別ものなんで、何うも恐れ入った御挨拶で、開いた口がふさがらなかつたことがござい
ます、ハ、ハ、ハ、ハ、まア斯こうしたもんでげすから、若い美しい御婦
人を見て怒おこる方はありますまい。上州屋の帳場でも器量の良いいお
若さんが伊之助を尋ねて参ったんですから、すこし岡焼の気味で
な、番州はじめ見惚みとれております。伊之助はお若が尋ねて来よ
うなんかとは夢にも存じませんけれど、虫が知らしたのかツカノ
と店の方へ参りますと、お若が店さきに立つておりますから驚
きましたね、思わず知らず声をかけ、

伊「オヤお若さんじゃアないかい、何うして出て来なすつた、
まア此方こちらへお這入りなさい」

若「はい、参つてようございますかね」

伊「いゝ所どころですか、誰も心配しなざるものは居やアしません」

と自身で座敷へ連れてまいりましたが、今夜駈落をしようとする束がしてあるんだから、態々わざ／＼斯うして来るには何か訳のあることであろう、今朝勝五郎に見付けられた一件もあるから、こりや晩まで待つていられない事が出来たのだな、と察しましたので、

伊「何うして来なすつたのだ、そして大層そわ／＼していなさるようだが、若しもや今朝けさのことから」

と心配らしくお若の顔をのぞきこみます。左様そうなるとお若の方からもジツと伊之助の顔を見詰めまして、ホツと溜息をつき、グツと唾を呑こみまして、

若「ほんとに大変な事になったの、それだけれど一心でヤツと此処こゝまで逃げて来たんだから、直ぐこれから約束どおり連れて逃げておくれ、若しぐずぐずして見付けられた日にやア最もう今度こそ何うすることも出来なくなるよ」

伊「エ、大変なことツて」

と段々きゝますると、朝伊之助に別れたのちの事柄を話す。やアそれはとんでもない、そんなことなら一刻でも斯うしてはいられないと云つて、伊之助も慌あわてまどいまして、元より荷物といつてはないが、行李の始末なんかは昼間のうちにしてありますから、それではと申して、伊之助は上州屋方を引はらい、お若と二人立た出で、車に乗つて新橋停車場ステーションへ着きました。調子のわるい時は

悪いもので車が停車場に着くと、直ぐ入口の戸はぼったり閉められ、急ぎますものですからと外から喚わめきましてもなか／＼戸はあけてくれません。そのうち汽笛の声勇ましく八時二十分の汽車は発車しましたから、お若も伊之助も落胆がっかりいたし、あゝ馬鹿々々しい、ちよいと開けてくれさえすればあの汽車で神奈川まで一ひと飛びに往ゆかれるもの、何なんぼ規則があるからッて余あんまり酷ひどい仕方、場内取締の顔を見るも腹がたつて堪らない、そうかと云つて打付ぶつつけて愚痴をこぼすことも出来ないので、抛よんどころなく次の横浜行きゆ九時十分まで待たねばなりません、待つてゐるのは仕方がないとしても、若しも其うちの中に追手おつてが掛り、引戻されはしまいかとそれのみが心配で、巡查こちらが此方の方へコツリ／＼と来るを見ては、両人ふたり

の様子を怪しく思つて尋ねるのではないか、ひよつとお若の頭に気が注ついてそれから駈落の露頭ではないか、とビク／＼して彼方かなたへ避け此方こなたへ除よけ、人のなかを潜くぐりあるいても猶なほ気が咎とがめるは、此処こゝに集まつてまいる人々でございます。知り人でもあつて認められては大変とおもえば思うほどに、摺合すれあう人々がじろ／＼と見るような気がいたして、何うも一時間をこゝに待つてゐることが出来ない。すると八時五十五分に赤羽あかばね行きの汽車が発車します報鈴しらせがありますから、

伊「最もう十五分経てば横浜ゆきは出ますが、斯うしてゐるうちにね、ひよつと、鳶頭おつでも追かけて来ては仕様がないから、私わしはこの汽車で品川まで行ゆこうかと思うんだが」

若「あゝ、それがいゝよ、こんなにごたく／＼しては何処どこに知ったものがないとも限らないから、東京の土地をはやく離れてしまふがいゝわ」

伊「品川だつて矢ツ張東京に違ひはないが、こゝほどごたく／＼は仕ないから、直ぐ乗りかえるんで、厄介は厄介だがね、どうもその方が安心の気がするから左様そうしようよ」

若「また間に合ないといけないから」

伊「ナニ大丈夫だよ、今度はそんなヘマは組みませんからね」

と伊之助は札売場に至り、下等二枚を買つて参り、お若とゞもに汽車に乗込みましたから、ヤツと胸をなで下おろして人心の付いた気がいたしました。新橋から品川と申せばホンの一丁場煙草一服

の処で、巻まきた 苳たばこめしあがつて在いらつしやるお方は一本を吸いきらぬ間まに、品川々と駅夫の声をきくぐらいでげすから、一瞬間に汽車は着きました。が、丁度伊之助お若が今下車しようと思しますと、火事よく〜という声がいたす、停車場ステーションに待まち合あすものは上を下へと混雑して、まるで芋の子を洗うような大騒ぎでげす。その上品川へ下りるものは吾勝に急ぎまするので、お若と伊之助は到頭はぐれて仕舞いましたんで、お互に気を揉んで捜し合いますが、何をいうにもワア〜という人声はげが劇はげしいから、さつぱり分らない。

甲「どこだ〜、火元はどこだ」

乙「歩かち行新宿の裏から出しアがツたんだ、今貸座敷なめを嘗なめてアが

るんだ」

丙「そりや大変、阿魔のそこへ行つてやらなけりやアならねえ、ヤーイ、ワーイ」

丁「馬鹿にしてあがらア、手前たちが火事場稼ぎをするんだらう、悪く戯けあがッて」

丙「こん畜生なに云やアがるんでえ、そういう手前こそ胡散くせえや」

丁「なにを、この盗賊」

なんかと騒ぎのなかで喧嘩が始まり、一層にごった返して、子供や老人は踏つぶされるやら、突飛さるゝやら、イヤもう大変の騒動でございます。その中でお若さんは彼方へもまれ此方へ

押されいたしまして、

若「伊之さんや、伊之助さんや」

と声を噎からして見得も外聞もかまわず呼んでおりますが些ちつとも知れない。此の大騒ぎのうちに横浜ゆきの汽車は通りすぎ、火事も幸いにボヤで済みましたから、四辺あたりも鎮まつてまいり、漸ようよう停車場内しずかも静になりましたけれども、伊之助は何うしましたか姿が見えませんが、お若さんは、停車場の外へ出たり内へ這入ったりして頻しきりと探していなさるが何うしても居ないので、進退きわまりませんでしたね。今さら帰るには帰られもしないし、また神奈川在とのみにて行先ゆきさきも判然ときいて置かなかつたし、何うして好いかとうろくくして居りますと、新橋発十時の汽車はまた汽笛をならして通

り越して仕舞う。余り停車場内をうろつくので駅夫等は訝しくおもつて注意する様子は見える。若し巡査にでもこの素振を認められ尋ねられた時には何と答えたなら宜かろうか知らん、それに最う一度あとに発車があるばかりで、あゝ何うしようか、伊之助さんは何処へ往きなすつたのか知らん、途中で厭になり先刻の騒ぎを幸いに捨られたのじゃアあるまいか、イヤ／＼あの人はそんな薄情な気はない、矢ツ張り騒ぎに紛れて私を見失い、今でも屹度さがしていなさるだろう、それにしては此処らにいなさらねばならぬ筈だに……こりや神奈川まで行って待つていなさるんだらうか、私が行先も知らないことは能く呑込んでいるんだから、まさか自分ばかり先きへ行くことはあるまい、と心配しぬいております

が、時計はさつきと廻つて最^もう十一時に近くなる。今十五分すれば新橋から発車するのだが、この汽車が最終のもので、これに乗らねば翌^{よくあさ}朝まで待たなくツてはならぬ、それも伊之助と一緒に乗^{のりおく}後れるのなら、別段心配する事もございません、品川には宿屋もございませうことでげすから、泊る分のことゝ安心がしていられるが、何を云うにもお若さん一人でげすし、それに世間なれてゐる蓮ツ葉ものと違って、なかゝ宿屋なんかへ泊ることは出来ませんでげすから、その心配というものは一通りじゃアないので、何うして宜いか最^もううろつく勇氣もございませんで、腰掛の隅にジツとして溜息をつきまして、あゝ斯ういう苦勞をするも伯父さんの眼を掠^{かす}め、道ならぬ道に踏み迷つて我儘をした罰^{ばち}かも知れな

い、といよ／＼心細くなりますと、我知らず悲しくなつて参り、涙がはらく／＼とこぼれて来ます。そうこう致すうちに切符を売出すので、お若さんは最うぐず／＼して居られませんが、寧いっそ神奈川とやらまで行つて、何うしてなりと宿屋へ泊ろうと決心されましては、実に大奮発なんで、世間知らずのお娘子でこの決心をするというは怖いものでげす、誰が申し始めましたか存じませぬが曲者とは能く名付けました。怖いのは恋で、世の中に何が怖いッてこれほど怖おっかないものはございません。神奈川まで参つて伊之助を待とうと決心を致されましたお若さんは、切符売場へ参り神奈川一枚と買つておりますと、悄しお々として遣つて参つた男がある、目早くも認めましたから、身を交かわそうと致しましたが其の間ま

がございませんで、

男「オヤお嬢さんじゃげえせんかえ、まア今時分、何処どこへ行ら
しつたんでげすえ」

若「なにね一寸ちよいとそこまで」

と然さり気げなく答えはいたしまするものゝ、その慌わてゝ居ります
様子は直ぐ知れます、そわゝと致ちして些ちつとも落おちつ著ついては居ませ
ん。

男「えお嬢さん、お見かけ申せば何うも尋常なみならぬ御様子でげ
すが、何処へいらしつたのでげす、今お歸けえりになるんでげすかえ」
若「あゝ今歸かえるんですよ」

と申しますが神奈川行きくだんの切符を買いましたから、件の男はま

すく不審になりますますものですから、

男「お嬢さんたった只お一人で神奈川へ行いらつしやるんでげすね、何うも変で、お嬢さん悪いことは申しません、私わっしと一緒にけえお帰りなせえまし、お供いたします、何どんなお急ぎの御用か知れませんが、今から彼方あっちへお出でになりますと十二時過でげすよ、そんな夜更に若い貴嬢あなたさまお一人で、え、お嬢さん、決して悪いことは申しません、仮令改めたとえてお出懸なさるまでもねえ、一旦はお帰りなせえ、翌朝あすになりやア行らさきツしやる先方まで屹度きつと私がお供いたしますから」

若「あゝうるさいねえ、急用があつて行くゆんだから、うつちやツといておくれよ」

男「へへ、急御用てえのは、大方、ねえ、お嬢さん、神奈川あたり待ってるものがあるんでしよう、へへ、何サうるさがられたツて、フ、ム私わっしがお出先きまでお供しましょうよ、根岸の伯父御に頼まれて来たんだから、見届けなきやア役目がすまねえのさ」

とぐるりと変る調子にお若さんは恟びつくりいたし、何うか混雑に紛れてその男をまこうと苦しみますが、生あいにく憎夜は更けて居ます事で、待合室にもちらりほらりの人でげす。汽車へ乗込むところにも七八人のものしかいない。お若が如何に逃げてまわりましても、怪しい男は始終影身にそつて附いております。先方さきへ行き着いてからの心配よりは、只今では此の男をまくことに気を揉んでもな

かく思うように参らない。

ステーション

品川の停車場でお若が怪しい様子に付けこんで目を放さない

うろつ

気味のわるい男は、下谷坂本あたりを彷徨いております勘太とい

かんた

う奴。元は大工でげしたが身持が悪いので、親方にもはなれ、仕

事をさせてくれるものもない、そうなって参ると猶更なまけに怠るよう

になつて世の中の稼いで暮すと申す活なりわい業に逆らつてゆくもので、

ごころつき

到頭破落戸仲間へおち、良くない悪法ばかりやつております。根

きも

ふて

が胆ツ玉の太え奴でげすから、追々その道の水に染まるにつれま

して度胸がすわり、仲間うちでは相応に顔が売れてまいる、坂本

の勘太てえば、あの墨すみぞめ染勘太かと申すぐらいで。この野郎が墨

まっこう

染という抹香くさい

いみよう

異名をとつた訳を申し上げないとお分り

になりますまいが、何も深い理窟のあるんではございません、異
 名だの^{あだな}綽名だのと申すものは御存じの通り、その者の身体のうち
 か、あるいはまた言行のうちに一ヶ所の目安になるものがあつて
 呼ばれるんでげす。勘太ツてえ奴も^{やっば}矢張りそうなんで、脊中に墨
 染の^{ほりもの}文身をしているからでございます。申すまでもないことで
 げすが墨染とはお芝居なんぞの中幕によく^や演るあの^{せき}関の^と扉でげす
 な、^{おおも}大伴の^{くろぬし}黒主が小町桜の精に苦しめらるゝ花やかな幕で、
 お芝居には至極結構なもので、^{いつ}何時みても見飽のしないもの。此^こ
 奴^{やつ}が何うしてお若さんを知つておりますかと申しますと、元大工
 でげすから晋齋の^{たびく}とこへ^{たびく}度々親方と共に仕事にまいり、お若さ
 んが居なされたを^{かきまみ}垣間見たんで、その^{あて}嬋^{やか}娟な姿に見とれ^{ほん}茫然

いたして親方に小言をいわれていた。お顔を拝みまするたんびにぶるツぶるツと身ぶるいをして魂を失つて仕舞いました。元より惚れぬいてはいるが、流石さすが親方のお出入先ではあるし、自分がたゞき大工であるから、とても遂げらるゝ恋でないと諦めても煩惱ぼんのうはますゝ乱れてまいり、えゝという自暴やけのやん八と二人づれで、吉原へ繰込みましては川岸かし遊びにヤツと熱を冷さましておりました。そのうち親方もしくじり、破落戸ごろつきとなつたから、根岸の寮へ参るどころか足ぶみもならない。もう斯うなつては手蔓てづるが切れて顔を拝むことも出来ませんので、抛よんどころなく諦めて仕舞いました。でげすが何うも未練は残っている。時ともすると根岸のお嬢さんのことを思い出し、齒軋はぎしりいたして悔くやんでおりました。今夜も懶なまけも

のの癖として品川へ素見ひやかしにまいり、元より恵比寿講をいたす氣
 で某楼あるうちへ登りあがましたは宵の口、散々さんざツ腹遊ばらんでグツスリ遣るとあ
 の火事騒ぎ、宿中しゆくじゆうは鼎かなえの沸わくような塩梅しき、なか／＼お客
 様に構かまつていられない。上を下へと非常に混雜まじいたしますから、
 勘太はこれ幸いと戸外おもてへ飛びだし、毎晩女郎屋近所に火事があれ
 ばいゝ、無錢たぐ遊あそびが出来あるなんかと途方もない事を申します。そ
 う火事が矢鱈やたら無性むしようにあつて堪たるもんでございますか。さて品川
 停車場ステーションより新橋へ歸かへるつもりで参まゐつて見ると、パツタリ逢あつた
 はお若わかさんでげす。最初は只ただだよく面影おもかげの似た女としげ／＼見み
 惚とれ、段々と傍へ寄よつて参まゐつて見れば姿こそ變かつておりますが、
 身み顫ふるいふるの出るほどに惚とれた根岸のお嬢さんでげすから、勘太も驚

きましたね、マサカス様こんなところで出会うとは夢にも思わないから、
 只一人ではあるまい、誰か同伴つれがあらうと注意をしても同伴はな
 い、ハテ変なこともあるわ、お嬢さんが一人で此の辺あたりにいなさる
 は読めねえ訳と、ジツと目を止めて視みれば其の様子のおかしいの
 で、悪党だけに早くも駈落さとと覚りましたから、しめたく、うま
 く欺だましこんで連れこみせえすりやア、否いやおう応おういわざず靡なびかせる工
 夫はあるぞ、今夜は弁天様から女にょふく福ふくを授けられているそうだ、
 今の騒さわぎで無た銭ぐ遊ゆうびをした上、茫ぼん然やうり帰けえらうとすると此こん様な上首尾、
 と喜びまして種いろく々お若さんに取入りらうとするが受付けません。
 この上は脅おそして連れて行くゆに如しかずと領うなぎ、伯父おのれさんの晋齋しんさいを笠
 に着て引立てようとはいたすもの、何なんぼ悪者あくものでも己おのれの惚おぼれてい

る婦人を手荒く扱いかねますので、流石さすがに手を取って引張ることもしない、顔は知っているが名も知らない気味の悪い男がつきまつ附纏わりますので、お若さんは心配でならない。何うにかして巻いて仕舞おうといろくく遣って見ますが、何うも自由まにならぬうちに、新橋発の汽車は品川へ着き、ぞろくくと下車するもの乗車するものでごたくくしている。こんなときに撒まかないととても紛れることは出来ぬと、態わざとごたくく致す人中をよ選よつて漸ようう汽車に乗りこみます。やがてピーと響く汽笛が深夜でげすから物凄ひいように鳴渡り、ゴツトくくという音が仕出して動き出しましたから、まあ宜よかった、まさか神奈川まで尾ついては来こまいと、胸なでおろしますもの、若もしやと思つて室内を伺ういます。気味の悪い

男の影は見えないから、此処こゝに一安心ひとあんしんは致しましたが、そう
なると直ぐ心配になつて参るは神奈川へ着いてから何うしたら宜か
ろうか、好塩梅いに伊之さんが待つてゝくれゝば可よいが、若しも居
なかつたら何うしよう、宿屋へ泊るにしても一人、それに女らし
く髪でも結つてゐることか、手拭をとつたらいが栗坊主、さぞ訝おか
しく思うだろう、こんなことゝ知つたら鬘かづらでも買つてかぶつたも
のを、まアこれでは仕様がない。と流石さすがに一人歩きましたことのな
いお若が思いに沈んで心細く、ほろりゝと遣つて居りましたが、
汽車は間もなく神奈川へ着きましたので、悔びつくりして下車いたしました
が、心当にして来た伊之助の姿は認めることが出来ません。停ステアー
車場シヨンの中でうろゝしてあります。何方どっちへ出たら宿屋があるか

それさえ分らないので、人に聞こうかと幾度か傍へ寄つても何うも聞くことが出来ず、おい／＼人は散り汽車の横浜さして行く音も幽かすかになつたから、思い切つて停車場外がいへ出でますると、

勘「オイお嬢さん、其処そこにいなさつたか、篋棒べらぼうに探がさせなせえした」

と声かけられて又恟りいたし、もう仕方がない、逃げ出して何処この家へでも飛込んで助けて貰おうと決心はしました。何なんにしても夜が更けているんだから閉めてる家ばかり、仕方がないと駈け出しますると、勘太は忽ちたちま追いすがり、緊り袂しつかたもとを押えて、

勘「何なんだな、逃げようツて逃げられるものか、アハ、ハ、ハ」
杖とも柱ともたのむ男にはぐれましたお若さん、気も逆上のぼせて

うろく／＼して居ります処を勘太につけられ、ヤツと虎口ここうをのがれたと思つてるに停車場ステーションへつくと直ぐ、こゝまでも執念ぶかく尾つけて参り、逃げようと云つたツて逃さぬやらぬと、袂をおさえられましたんで、モウ絶体絶命の場合でげすから、アレーという声をたて、猶逃げられるだけはと、掴まれました袂をはらつて駈出します。人間が一生懸命になるといは怖しいもので、重いもの一つ持ったことのないお若、もとより力量ちからのあろう筈はございせんが、恐いと申す一心でドーンと突いた力は凄すさまじい、勘太は、勘「アいたゝゝゝゝ」

と云つて肋ひばらをかゝえ、ドツサリ倒れました。お若はそんなことには眼はとまりません、夢中でかけ出して一町ほども逃げ、思わ

ず往来の人に突当りましたが、精根せいこんがつかれて居るから堪らない、今度はぼったり自分が倒れた。驚きましたは突当られたもので、

○「エ、なんだ、慌てるにも程があるもんでございますよ、私わしへぶつ付つかつて、ハア、提灯ちようちんもなにも消されて仕舞った」

と眩きながら夜道を歩く人だけに用意はよく、袂をさぐりましてマツチを取り出し、再び提灯とほを点して四辺あたりを透すかし見ますれば、若い婦人おんなが倒れているので悔りいたし、さては今突当つたはこの女か、よくよく急ぐことがあつて気が急せいていなされたのであるう、可愛そうにと側によつて介抱するが、氣絶しているからいよく驚きまして、持合す薬を与えなどいたすうち、ようやく蘇生

しました。

○「ヤレく、お女中さんお気がつきましたか、まア可よかつた」

若「はい、誰方どなたか存じませぬが、有難うございます」

○「ハ、ア氣をしつかりさつしやりまし、見ればこゝらあたりのお方じやございませぬえ御様子、何処どこのお方でござえますえ」

若「はい、東京のものですが、訳あつて此の神奈川へ参る途みち、

品川の停車場ステーションで同伴つれにはぐれ難儀をしているところへ、悪者に尾つけられました此処こゝまでも跡を追つて来て」

○「エ、悪者に尾けられなせえましたと、それはさぞまア御難儀でございましたらう」

と親切に介抱して、段々と素性から何用あつて深夜に神奈川へ

来たと尋ねてくれるは、もう六十有余にもなる質朴の田舎爺おやじですから、まさか悪気わるきのあるものとも思われぬので、お若さんも少しは心が落著おちつき、明あからさま白まに駈落あらしのこそそ申しませぬが、同伴つれというは男で斯う斯うしたものと概略あらましを語ります。田舎爺も気の毒がりて猶その男の名前まで、根ほり葉ほり尋ねるので今更隠ひそしくなりました、伊之助のことを明かす。そうすると爺は恟おどろりして、口のうちに伊之助くと二三遍お題目でも唱えるように云っていたが、何か首肯うなずきまして、

爺「伊之助という男は何うやら私わしが知ってるものらしい、それと一緒に此処こゝへ御座るといふは、こりや私の家とこへござらツしやる客衆きやくしゆかも知れねえ、まア兎も角くも私のとこへ来きさせえまし」

と云われて地獄で仏に逢つた氣のお若さん、ホツと息をついて、それでは何分ともにと言つている後うしろに、一突き不意を喰くらつて倒れた悪者の勘太、我と氣がついてまだ遠くは往ゆくまい、折角見かけた仕事も玉を逃にがしちやア虻蜂あぶはちとらずで汽車賃の出どころがないと、己おのが勝手に尾ついて来ていながら直ぐ懐のグレ蛤はまを勘定いたし、おつ掛けてまいツたが、今度はお若一人でない、老爺おやしが側にいるのでうっかり手出しがならず、様子をうかゞつておるうちに、何うやらお若を老爺が連れて行きゆきそうだから、ドツコイ左様そううまく、仕事の横取はさせねえと、己おのが心にくらべて、

勘「この阿魔太ふてえあまだ、大金を出して抱えて来たものを途中から逃げさせてお堪たまり小法師こぼしがあるものか、オイ爺とつさん、此奴こいつの

いう事ア皆みんなな嘘だ、お前めえを詐だますんだぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、

と己おのが非を飾つてお若わかを連れ行ゆこうとするので、田舎爺は呆れ
 ましたが、男のこえが耳なれておりますから提灯をさしつけ、顔
 をのぞいて見ると聞覚えのある声こそ道理で、老爺が一人息子の
 碌ろくでなし、到頭むらうち村内にもいられず今は音信いんしん不通ふつうになっている勘
 太かたでげす。田舎爺は老おいの一徹いつてつにカツと怒り、

爺「わりやア勘太かただな、まだ身持みもちが直ひとらず他人ひと様に御迷惑ごまをか
 けアがるか、お女中おんなさん何も怖おっかねえことアございませぬえ、この
 悪わるたれは私わしが餓鬼がき」

といううちに早や言葉が潤うるんで参ります。親子の情としては然さ然さ
 もあるべきことございませぬ、我子こんなが斯様こんな碌ろくでもないことを

致し、他人ひとを悩めると思いましたら堪りますまい。

爺「さア、これからは己おれが相手になる、この甚兵衛じんべえが相手じゃ」

と敦圀いきまきまするので、流石の勘太も親という一字には閉口致し

ましたか、這々ほうくの体ていで逃げて仕舞います。そこで甚兵衛爺さん

お若さんを我家へ連れて戻り、婆アどんにも一伍いちぶしじゆう一什かくくを斯々

と語り、今夜は遅いからまあお休みなさい、明日あすにもなれば伊之

助を尋ねて参りますからと親切にいたしてくれまする。さて、伊

之助でございますが、品川の火事騒ぎでお若にはぐれ、いろく

と尋ねましたが薩張り知れない。そのうち最終列車はシューコト

くと出て仕舞い、只だ心配に心配をしぬいている。翌朝よくあさにな

つて再び停車場ステーションに参り探しましたが知れないので、駅夫などに

聞き合あすと、昨夜の仕舞い列車に乗りこんだらしいので、自分も
兎に角神奈川へ参つて探そうと汽車に乗り、停車場に着いて聞合
して見れど、何をいうにも夜更よふけのことで雲を捉つかむような探しもの、
是非なく甚兵衛の家うちへ尋ねて参り、お若さんと再会くだりの条に相成る
のでございまする。

六

伊之助の神奈川停車場ステーションへ着きましたは、お若さんが此処こゝにま
いって甚兵衛爺さんに助けられた翌朝よくあさのことでございますから、
なかくお若の行方を探ることが出来ない、左様そうかと申して再び

東京へ帰りましたところで、これとても何う探したら分ろうという目的めあてが付きませので、あゝ困ったな、己もこまるがお若さんは嘸難儀さぞをしていなさるだろう、あゝいう方だから一人歩きしたこともないに、方角も知れぬ土地に来てどんなに困るか知れたもんじゃないから、それにしても不思議だ、何うしてまア神奈川まで一人来なすつたろうか知らん、大方己が前の汽車で来ていると思ひこんでゝあろうが、あゝ困るな、可愛そうでならないことをした、こんな事なら品川まで出掛けずに、新橋から一緒に乗るだつたにと、いろ／＼と悔んでおりましたが、今更何なんといつても仕方がない、一旦甚兵衛爺さんのところへ落著おちついて探したら分らぬこともあるまい、お若さんの方でも屹度きつといろ／＼に探していなさ

るに違いないから、と伊之助はよう／＼決心いたしましたから、
久々で甚兵衛のところへ尋ねてまいる。村の入口には眼になれた田
舎酒屋の看板と申すも訝おかしいが、兎に角酒屋の目印となっており
まする杉の葉を丸く束ねたのが出ています。皆様がお名前だけは
お馴染みになつていらつしやると申しますと、私わたくしどもは近じき接にお
馴染みかと仰やる方もございませうが、明治の御代に生きてい
るものがなか／＼思いもよらぬことで、今を距さること四百十八年
前むごちみかどで後土御門帝の御代しろしめすころ、足利七代の將軍義尚よしひさの
時ときまで世を茶にしてお在いでなされた一休が、杉葉たてたる又また六むろくの
門かどと仰せられたも酒屋で、杉の葉を丸めて出してある看板だそう
にございます。そうして見ると此の目印は余ほど古くからあるも

のと見えます。さて序ついででございませうから一寸申しておきますが、一休様は応永元年のお生れで、文明十三年の御入寂ごにゆうじやくでいらせられますから、浮世にお在遊ばしたことは丁度八十八年で、これほど悟りをお開きなされたお方は先ずない。仮令たとえございまして俗人が存じておりますは、此の坊さん程お近附ちかづきはありませんでげす。その酒屋の隣が甚兵衛の家うちでございませうから、伊之助はズン／＼這入つてまいる。スルと奥の方で若い女の声かして甚兵衛爺さんも婆さんも頻しきりに慰さめている様子。ハテ悪いところへ来たわい、誰か客があるのか知らんと思いましたが、引返ひかえして出て行くゆも変ですから、

伊「爺やさん、お達者でございますか」

と声をかけますと、甚兵衛は、

爺「婆さんや誰か来たようだぜ、ちよつくら見て来さつしやい」
というので婆さんは入り口へ出てまいると、伊之助が立つて居
りますから恟びつくりいたし、挨拶もいたさずに、

婆「やア、来さしツた〜、お若さん、伊之助さんが来さし
ツた」

と喜ぶので伊之助もおどろきましたね、婆さんがお若さんと呼
びますからは、確たしかにお若が此こゝ処とに来てにちがいない、と不思議で堪りません。お若は老人夫婦と何うか伊之助を探す手だてを
と相談しているところではげすから、飛立つ思いで出てまいり、此
処とでお互いに無事の顔見て安心いたし、それから甚兵衛の厄介に

なつて暫らく居ますうちに、お若さんのお腹なかは段々と脹ふくれて来るので、遠走りもすることが出来ぬところから、遊んでもいられます。と云つて外ほかに何もすることがない。田舎ではございませが追々ひら開けてまいり、三味線などをポツリ／＼と咬かじる生意気も出来て来たは丁度幸いと、伊之助は師匠をはじめ、お若は賃仕事などいたし、細々ながら暮している。そのうちにお若は安産いたし、母子おやことも肥立ひだちよく、甚兵衛夫婦は相変らず親切に世話してくれます。お若伊之助は夫婦になつて田舎で安樂に暮して居ります。生れた子供も男で伊之助のいの字とお若のわの字を取つて岩次いわじと名をつけ、虫気むしけもなくておい／＼成長してまいるが、子供ながら誠に孝心が深いので夫婦も大層喜んでいました。これより暫らくは

夫婦の上には何事のおはなしもございませませんが、末になると全く離魂病の骨子こっしをあらわし、また因果塚のよつて起ること、相成るのでございます。こゝに品川の貸座敷わこくろうに和国楼と申すのがございまして大層流行はやります。娼妓も二十人足らず居り、みんな玉が揃そろっているので、玉和国と、悪口をいう素見ひやかしまでが誉めそやしているぐらいでげす。今日は暇だと申しても一人で二人ぐらいのお客は屹度きつとある。忙しいと来たら五六人ずつはありますからなか／＼廻しが取れませぬ。甚助じんすけをおこす客もあるが怒おこつて出て行くものゝないも訝おかしい。それで安直店みせと来ていますから滅法な流りりかた、この楼うちに小主水こもんどと呼ばれて全盛な娼妓がある、生れはなんでも京阪けいはん地方だと申すことで、お客を大切だいじにするが一つの

呼よびものになつています。この小主水の部屋から妹分で此のごろ突つ出きたされた一人の娼妓こどもは、これも大阪もので大家たいけの娘でございまして、家の没落うちに身を苦界くがいに沈め、夜よごとに変る仇あだまくら枕あした、朝あしたに源兵衛げんべえをおくり、夕ゆうべに平公へいこうをむかえております。この者の名を花里はなざとといすこぶ頗る美人でげすから、忽たちまちのうちに評判になり、

○「コウ熊ア、玉和国の花里てえのはすばらしいもんだとよ」

△「ウム左様そうよ、土地第一でえいちの別嬪べっぴんだとよ」

○「手前てめえおがんだか」

△「己おひらア、仕事を仕舞うと直ぐこれで三晩おがみに来るが、彼奴きやつ流行妓はやりっこだからなア、まだお目にぶら下らねえのさ、今夜すけみせ助見世すけみせに出アがるところでもと先刻さつきから五度ごたびまわつたが、よくく

御縁がねえのだ、明日の晩は半纏を打殺しても登楼らねえじゃア気がすまねえや」

○「素敵に逆上のぼせていアがるわ、顔も見ねえ女に夢中になる奴もねえぜ」

△「馬鹿奴め、美人いに極つてらア」

なんかと騒ぐものもあるほどでげすから、其の全盛は思いやられます。軍艦が碇泊ていはくすると品川の宿は豊年でございます。皆様御存知のとおり海上にあつて毎日事務をとつてお在いでなさるお方々でげすから、何れいすの港になりと船が泊りますることになると、それ／＼にお暇が出て日頃の骨休みをなさる。成程そうでございましょう。軍人方でいらせられますから、いざ戦争という場合に

なりましては申すまでもないことで、甲板に屍をさらすとも一歩もお引き遊ばすなどという卑怯未練な方はございません。陸軍たりとて海軍たりとて勇武の御気象には少しの変りもない、日本固有の大和魂というものがお手伝をいたしますからでもございませうが、我邦軍人がたの御気象には歐洲各国でも舌を巻ておるようで、これは我が某将官の方に箱根でお目通りをいたしたとき直接に伺ったところでございます。これはお話が余事に外れ恐れ入りましたが、左様な御気象をお持ち遊ばす方々で在せられますから、ナニ暴風怒濤なんぞにビクとも為さる気遣いはない、併し永暴風雨をくつては随分御困難なもんだそうで、却つて戦争をしていての方が楽だと仰せられた軍人もございました。そういう御

難儀を遊ばしていらつしやるんでげすから、港々にお着遊ばした
 ときは些ちつとは浩こうぜん然の気もお養いなさらずばお身体が続きますま
 い。それでげすから軍艦が碇泊したというと品川はグツと景氣づ
 いてまいる。殊に貸座敷などは一番に賑にぎわしくなるんで、随分大し
 たお金が落るそうにございます。娼妓のうちで身請の多くあるは
 品川だと申しますも、畢ひつきよう竟軍艦の旦那に馴染を重ねるからの
 ことかと存じます。丁度紅葉もみじも色づきます秋のことですが、
 軍艦が五艘ごごそうも碇泊いたし宿は大層な賑いで、夜になると貸座敷近
 辺は恰まるで水兵さんで埋うまるような塩梅、何れも一杯召食きこしめしていら
 つしやる、御機嫌だもんですから、若い女子供は怖おっかながるほどで
 ございました。それでなくってさえ流行はやります和国楼、こういう

時には娼妓こどもたち達は目もまわるように忙がしい。中々一人々々のお客を座敷へ入れることは出来ません、名代みようだい部屋には割床わりどこを入れるという騒ぎで、イヤハヤお話になつたものでございませぬが、お客様がそれで御承知遊ばして在いらつしやるも不思議なものでござすな。従つて娼妓達が勤め向きもわるいが、馴染になつて在あつしやるお客様は、ア、彼奴あいつも氣の毒な、斯う牛や馬を追いまわすようにされちやア身体が続くもんじやないよ、なんぼ金の為に辛い勤めをするんだツて、楼主ろうしゆがあんまり慾張りすぎるからわるい、政府でも些ちつと注意して一夜ひとよのお客は二人乃至三人より取らさねえように仕そうなものだ、なんかんと御自分の買馴染が一座敷へ三十分と落著おちついていられないのを可愛そうに思召しもございま

しよう。例の花里花魁おいらんでございりますが、この混雑ごったかえしている中に一層忙がしい、今日で三日三晩うツとりともしないので、只眠いねむいで茫然ぼつとして生しょうたい体がない。お客のお座敷へ出ても碌々口もきかないが、さてこれと名ざしてお招き遊ばさるゝお方はそんなことには頓とんじやく着はなさりません、只花里々と夢中になつていらつしやる。いま花魁の出ているは矢ツ張り軍艦ふねのお客で、今夜は二回うらをかえしにお出でなされたんでげすから、疎末そまつにはしない、頻しきりに一おとついのぼん昨夜ふづとめの不勤を詫していると、新造しんぞが廊下ら、から、

新「花里の花魁え、一寸ちよいとおかおを」

花「あゝ今行くよ、ほんとにうるさいことねえ」

客「情^{いひと}人が逢いにきたとよ、早くいつて顔を見せてやるが好^よいわ、のう花魁、ハ、ハ、ハ、ハ」

花「御冗談ものですよ、私のようなものに情人なんかあるもんですか、ほんとにモウつく／＼厭になつた」

新「花魁、花魁え、お手間はとらせませんから」

花「あいよ、今参りますよ」

と客に会釈して立てば新造は耳に口よせ、

新「お初会の名指^{なごし}です」

花「そう、何様人^{どんな}だえ、こないだのような書生ツぽだと御免蒙

るわえ」

新「ナニ美男^{いとおとこ}さ、風俗^{なり}は職人衆^{しゆ}ですがね、なんでも親方株の息

子さんてえ様子ですわ」

と新造に伴なわれまして引附ひきつけへまいりますと、三人連の職人衆しゅうでございいますが、中央なかに坐っているのが花里を名ざして登楼あがつたんで、外はみなお供、何うやら脊負おんぶで遊ぼうという連中、花里花魁自分を名指してくれたお客を見ますると、成程新造の申しました通り美男子いゝおとこで、尋常たゞのへつぽこ職人じゃアないらしく思われます。あゝ好いたらしい若い衆しゅうだと思つて見ぬ振をしてじろりく顔を見るもので、男の方では元より名指して登楼あがるくらいでげすもの、疾とつくに首ツたけとなつて居おるんでございます。臆やがてお引けということに成つても元より座敷は塞ふさがつて居りますから、名代部屋へ入れられ、同伴つれもそれ／＼収まりがつかしました。

花「一寸とお前さん、御免なさいよ、直ぐ来ますからね鼠にひかれちやアいけませんよ、ホ、ホ、ホ、」

客「全盛な花魁だから仕方がねえや、まア寛くり行つていらッしやい、屹度留守はしていらアな」

花「まことに濟まない事ねえ、何うか堪忍して頂戴よ、生憎お客が立こんでるもんだから、寝て仕舞つてはいやだよ」

客「ハイ、天井の節穴でも数えているからいゝてえば」

花「いま新造衆しゆに小説本でも持せてよこすからね、屹度寝てしまッちや厭よ」

媽然にっこりいたして吸付煙草すいつけ一服を機会しおに花魁は座敷を出てまいります。若い職人風の美男子いゝおとこも、花里の全盛なのは聞きつたえ

ておりまするし、殊に初会のことのでげすから、左様打ちとけて話
 をすることもない。今夜はこれきり寝転ねこかしかとは思つていますが、
 同伴つれの手前もあることで、帰るとも申し悪いにくのでもじくいたし
 ている。寝ようと思つても引切りなしに廊下にひゞきます草履の
 音が耳につき、何うしても寝られるものでありません。すると座
 敷の障子がスーとあきますから、さて来たなと思ひますと左様そうで
 ない、有明の油をさしに来たのですから、えッ 畜ちきしやう 生だまされ
 たかと腹は立ちますが、まさかに甚助らしいことも云われないの
 で、寝たふりで瞞ごまかしている。いよ／＼今夜は寝転ねこかしに極つた、
 あゝ斯様こんなことなら器用に宵の口に帰つた方がよかつたものと、眼
 ばかりぱちくり／＼いたして歎息たんそくいたしています。花里の方で

も初会ながら憎からず存じまする客でげすから、早く廻ろうとは思つてますけれど、何を申すも大勢な廻しのあることで、自儘じまゝに好いた客の傍そばへばかり行つてゐることは出来ませんもんですから、漸ようよう夜明になつてこの座敷へまいりますと、うとくしています様子。

花「何うも済まなかつたこと、堪忍して下さいよ、あら厭だ、狸なんかを極めてさ、くすぐるよ」

と脇の下へ手を差し入れて、こちよくく。

客「フ、フ、フ、酷ひどいね花魁、あゝあやまつたくもう、フ、フ、フ、ム、そんなに苛いじめなくもいゝじゃないか、あやまつたツたてえばよ」

と腹這になれば、花里は煙草をつけて煙管を我手で持ったまゝ、
 一吸すわした跡を、その儘自身です、ひとすい 嬌然にっこりいたし、
 花「才、寒くなつたこと、もう浴衣ゆかたじゃア、明方あけがたなんか寒く
 て仕様がないわ」

この職人体の美男子いとおとこは何物でございましょうか、花魁しよかも初いぼれ
 会惚いぼれでもしているらしく思われます。さて職人体の好男子いとおとこで
 ございますが、あれは例のお若さんが根岸の寮で生みました双児ふたご、
 仕事師の勝五郎が世話で深川の大工の棟梁へ貰われてまいった伊
 之吉でございます。光陰は矢の如く去つて帰らずとやら申しまし
 て、月日の経ちますのは実に早いもので、殊に我々仲間で申しあ
 げるお噺はなしの年月、口唇くちびるがべろくと動き、上腮うわあごと下腮ぶつが打付

かります中うちに二十年は直ぐ、三十年は一口に飛ぶというような訳、
考えてみますれば呑氣至極でげすがな、お聞遊ほうばす方でもそれで
御承知下されて、お喋りする方でも詰らないところは端折はしよつて飛
して仕舞うと申す次第で。大芳棟梁のそこへ貰われてまいった伊
之吉、夫婦が大層可愛がつて育て、おいくと職を仕込みますが、
実まことに器用な質たちで仕事も出来て来る。多くある弟子達にも気うけは
至極よろしく、若棟梁くと立てられて、親の光りで何れいずへまい
りましても引けは取らない。職の道にかけても年が若いから巧者
こそありませんが、一通りの事は何をもつて行つても人に指図さしずが
していかれる。それですからますますく評判はいく。大芳の若棟梁
は今に立派なものになんなさる、親方いさんも好い養子いをもらい当

て、仕合せだ、あゝ甘え塩梅しきに行けば実子がなくつても心しんぺ
 配えすることはないなどと申して居ります。伊之吉は仲間にも顔
 が売れてまいれば追々交際つきあいも殖ふえる上、大芳棟梁もとより深川の
 変人、世間せけんむき向へ顔を出すなどは大嫌いでございますから、養子
 の伊之吉が人の用いもよく、用も十分に足りていくので、自分が
 出懸けねばならぬところがあつても、伊之やお前めえ往つて来てくん
 ねえな、と代理をさせるのでます。交際こうさいはひろくなり、折には
 これから人々と共に遊びに行く事もあるが、決して色に溺れるて
 え事なんかはありません。左様そう斯ういたしておるうち、品川の噂
 がちらく耳に這入り、玉和国楼の花里という花魁の評判が大層
 もないので、伊之吉も元より血氣の壮わかもの者ものでございまするし、遊

びというものが面白くないとも思っていないから、ふらり内弟子のものと共に品川へ参り、名指なぎしで登楼あがつて見ますと、成程なかくの全盛でげす。それで取まわしがいゝ、誠に痒かゆいところへ手の届くようにせられましたから、何うも捻ひねりばなしで二度うらを返さずにおくことが出来なくなる。後きぬ朝あのわかれにも何なんとなく帰しともない様子があつて、

花「折角斯うして来て下すつたのに生憎立てこんでいてねえ、何うも濟まないんです、此の儘帰すもまことに気がかりでならなけれど、無理に引きとめておいてはお家の首尾うちもありましようし、またね、あの女こにも申し訳がありませんから、私は我慢して辛抱しますが、お前さんはこれに懲こり々くしてもう二度と再び来て

は下さるまいね、ですが可愛そうだと思つたら何うかお顔だけでも」

と言さして後あとはいわず、媽にっこり然なん笑なんいました花里の素振は何うも不思議でございます。伊之吉も何となく別れて帰るが辛くなりましたが、左様そうかといつて初会で居続けするも余あんまり二本棒と笑わるゝが辛く、また一つには大芳夫婦への手前もありますから、その朝は後うしろがみを引かれる心地いたして、思い切つて支度をするうちに、連つれのものも、さア帰ろうと促つしますので、

伊「花魁、とんだ御厄介になりました、明日あすの晩あたりまたお邪魔にまいりましょう、来てもいゝでしょうかね、ハ、ハ、ハ、ハ、」
花「本ほん当とですか、本ほん当とに明あ日した来あて下くださいますか、屹い度どですよ、

屹度まつてますからね」

花里に逢つてから伊之吉の様子が何うも変だ、何となくそわ／＼いたして茫然ぼんやりして居ります。お職人衆というものは何事でも綺麗さっぱりいたしたもので、思ったことを腹へ蔵しまつておくなんかてえことは出来ません。お名にお差合さしあいがあつたら御免を頂きませんが、

八「オイ熊ア、手前てめえ大層景気がいゝな、始しよつちゆう 終 出かけるじやアねえか」

熊「フ、ム左様そうよ、彼女が是ぜツ非来びてくれと吐ぬかしたアがツてよ、己おらが面を見せなけりやア店も引くてえんだ、本ものだぜ、鯧しやち銚ほこだちしたつて手前てめえ達に真似は出来ねえや、ヘン何どんなもん

だい」

八「笑かせアがらア、若^{わかてえし}大将^{しょう}に胡麻すりアがつて脊負^{おんぶ}のくせに、割^{わりめえ}前^{まへ}が出ねえと思つて戯^{ふざ}けアがると向う臍^{ずね}ぶつ挫^{くだ}かれねえ用心しやアがれ」

熊「ヘン嫉^{そね}め、おたんちん、だがな八公、若大将にやア氣持が悪くなるてえことよ、阿魔奴^{あまぬめ}でれ／＼しアがつて、から埒^{らち}口^{くち}アねえ」

八「阿魔アツて品川の奴^{やつ}か」

熊「そうよ、玉和国の花里てえ素敵もねえ代^{しろもの}物よ、夏の牡丹^{もた}餅^{もち}と来ていアがるから小癩^{こじやく}に障^{さわ}らア、な一晚行つて見な、若大将^{もて}の欸待^{もて}かたてえものはねえぜ、ところでよ、此方^{こつち}の阿魔と来た

ら三日月様かなんかで、刻^{きざ}苳^{ごみ}の三錢がとこ煙^{けむ}よ、今度ア行く^ゆにやア二つと燐^{まち}寸^ちまで買^かつてかねえじやア追付^{おつ}かねえ、これで割^{わり}前^{めえ}勘定^かだつた日にやア目も当てられねえてえことよ」

八「風^{かぜ}吹^ふき鳥^{がらす}の貧^{びん}つくで女の子に可愛^{おし}がらりようとア押^つが強^ええや、この沢^{たく}庵^{あん}野郎^や」

熊「こん畜^{ちき}生^しッ」

なんかと伊之吉の事から朋^{とも}友^{だち}喧嘩^{おこ}が起るといふようなきわぎ。伊之吉も凝^こつて品川通いを始めますと、花里^{しき}の方でも頻^しりと呼ぶ。呼ばれますから参る。まいますからますます深くなるといふ次第で、伊之吉が来ると岡焼半分^{あが}に外の女郎^{かき}が花里にからかいます。トントンくと登^{あが}るをすが籬^{かき}のうちから見て、あゝ来て呉

れたなど嬉しく飛立つようですが、他の張店はりみせしている娼妓の手前もありますので、花里は知らぬ顔していても眼の早い朋輩が疾とづくに見附けていますから堪りません。

娼「花里さん来たよ、早く側へ往つておあげよ、そんなにシラきだらを切なくツてもいゝわ、モウ気は部屋へ行つてるんだよ、呆れたもんだねえ、花里さんの抜ぬけ殻がらさんや、オイ〜」

左右から突つついたりなにかいたします。左様そうされるとされるほど嬉しいもので、つツと起たちまして裨しか襠かけの褌つまをとるところを、後うしろから臀いしきをたゝきます。

花「あら酷ひどいことよ、宵店からお尻をたゝいてさ」

と持ったる煙管を振り上げます。と元よりたゝかぬとは知って

います。が仕打は おおぎよう 大 仰なもので、

娼「ア、あやまつた、く、親切にお咀 ましない 呪をしてあげて怒られ

ちやア堪らないねえ、今夜は外にお客がなく伊之さんとねえ」

花「御親切さま、そんなのじやありませんよ」

娼「うそばかり吐 つ いてるよ、毎日惚 のろ けているくせに今夜に限 つ てさ」

花「そんなことア情人 いろ のうちさ、女房 にようぼ となれば面白くなくつ

てよ、心配でならないわ、ホ、ホ、」

娼「おや、花里さんにも呆れ すのろけ ツちまアねえ、素惚 かんべ 気じやア堪

弁 ん が出来ぬからね」

花「ハアいゝとも、何 なん でも御馳走するわ」

と双方とも丸でからツきし夢中で居りますると、茲こゝに一つの難儀がおこります条くだりは一寸と一服いたして申し上げましょう。

七

えゝ一段々と進んでまいりました離魂病のお嘸はなしで、当席にうかゞ

いまする処は花里が勤めの身をもつて情人伊之吉に情を立てると

いう条くだり。日毎夜毎に代る枕に仇浪は寄せますが、さて心の底まで

許すお客は余あんまりないものだそうでござります。無粹ぶすいな私わたくしどもに

は些ちっとも分りませんが、或ある大だい通つうのお客様から伺つたところでは

浮気稼業をいたして居おる者は却かえつて浮気でないと仰しやいます。

成程惚れたの腫れたのといやらしき真似をいたすのが商売でげすから、余所目には大層もない浮気ものらしく見えましても、これが日々の勤めとなつては大口きいてパツ／＼と致すも稼業に馴れると申すものでござりましょう。其の代り心底からこの人と見込んで惚れて仕舞うと、なか／＼情合は深い、素人衆の一寸ぼれして水でも指れると移り気がするのと訳がちがうそうで、恋の真実は苦勞人にあるとか申してございますのも其処等を研究したものでありましようか。花里花魁は何うした縁でございますか、あの明烏あけがらすの文句の通り彼の人かに逢うた初手から可愛さが身にしみ／＼と惚れぬいて解けて悔しき鬢びんの髪などと、申すような逆上のぼせ方ほでげす。伊之吉とて同じ思いで三日にあげず通っている。

すると茲こゝに一つの難儀が持ちあがりました。と申すは花里を身請しようというお客が付いたんで、全体なら喜んで二つ返事をする筈であるが、そこが何うもそうすることが出来ない。伊之吉という可愛い情人おとこがあつて、写真まで取かわせてある、その写真は延えんぎだなな喜棚にかざつて顔を見ていぬときは、何事をおいても時分ときになるきつとかげぜん膳ぜんをすえ、自分の商売繁昌よりは情人の無事そくさ息いき才いで災難をのがれますようにと祈つているほどで、泥水から足をあらつて素人になるを些ちつとも嬉しく思いません。身請ばなしが始まりましたから花里は鬱ふさぎ切きつて元気がない、只だ伊之吉が来ると何かひそく話をするばかり、それも廊下の蹠あし音おとにも気がおいて居ます。その身請し為しようという客は、欧米を航海して無事

に此のごろ帰朝されました、軍艦芳野よしのの乗組員で少しは巾のきく
 お方、お名前は判然と申し上げるも憚はげりますから、仮うながに海上みわた
 渡ると申しあげて置きます、此のお方がまだ芳野へお乗のりこみにな
 らぬ前、磐城いわきと申す軍艦にお在いであそばし品川ていはくに碇泊ななされます
 る折、和国楼ふねで一夜の愉快つくを尽つくされましたときに出たのが花里で、
 品川では軍艦ふねの方が大とくのお花客とくでげすから、花里もその頃はまだ
 出たてもてゞはごごいいますし、人々から注意おろそをうけて疎おろそかならぬ歎もてな
 待しをいたしたので、海上も始しよちゆう終ゆう通おつて居おりましたが、そ
 の後ご芳野へお移りになつて外国航海と相成りしに後うしろ髪がみをひか
 れる気はいたすものゝ、堂々たる軍人にして一婦人いっふじんの為に肘ひじを
 ひかるゝは同僚の手前も面目なしとあつて、綺麗べつぱいに別盃べつぱいをお汲

みなされ、後朝のおわかれに、

海「それでは僕は今日四時には出帆して洋航するからね、

お前も無事で、身体を大切に稼ぎなさい、これが別れとなるかも知れぬ、併し無事に航海を了つて帰朝するときは、お前も何時までも斯うして勤めさせては置かぬからな、当にはならぬことだがせめては楽しみに待っていてくれ、男子の一言帰朝さえすれば屹度身請してやる」

と言葉残して芳野が吐く一条の黒煙をおき土産に品川を出帆されました。此方の花里でございます。元々好いた男というでもなし、たゞ聞ながしに致して居りましたが、海上の方では一旦約束した言葉、反故にしては男子の一分たゞずと、大きに肩

をお入れ遊ばして、芳野艦が恙なく帰朝し、先ず横須賀湾に碇ていは
 泊くになりまますと直ぐ休暇をとつて品川へお繰出しとなり、和国
 楼へおいでになつて、身請の下したばな談しが始まりましたんで、花里
 は恟びつくりいたして一度二度は体ていよく瞞ごまかしておき、斯うなつては最
 う振つてふつて振りぬいて、先から愛憎あいそをつかさせるより手段てだては
 ないと、それからというものお座敷へは出るが腹が痛むの頭痛が
 するのと、我儘ばかり云つても海上は身請まで為しようという熱心
 でございますから、花里が嫌いやでふるとは思われませんで、これも
 我には心こゝろ易やすだての我儘と自惚うぬぼれが嵩こじていましたから、情人おとこ
 の為に嫌われると気の注つきませんで持ったもの。先ず一心に凝こつ
 ていらつしやる時は誰方どなたでも斯ういう塩梅なものでございまし

よう。いやがツて居ればその客が余計に来るもので、海上は頻しきりと登楼いたし、花里には延のべたらに昼夜の揚代ぎよくがついておりますから、座敷へ入れないことは出来ぬ、まるで我わが部屋は貸し切りにしたような始末で、まことに都合がわるい。伊之吉が来ても何時も名代部屋で帰して仕舞わねばならぬ。訳は知っている、無理な事は云わないが、さて心の中うちでは面白くないもので。偶たまには訝おつしやくに癢かゆることがあるを花里は酷ひどく辛く思つて鬱ふさぐ上にも猶なほふさぐ。左様そうされると元々自分に真実つくしている女の心配するんですから、気の毒になつて機嫌の一つも取つてやるようになる。平常ふだんならそれなりに媽にっこり然して他愛なくなるんですが、此の頃は優しくされるにつけて一層悲しさが増してまいり、溜息ついて苦勞するのが

伊之吉の身にも犇々ひしくと堪こたえます。さア左様なるといよく情は濃くなつて何うにも斯うにも仕ようがなくなる。今夜も伊之吉が来たが、例の通り座敷は塞ふさげられている。尤もつともまだ海上は来っていないが、晩には屹度来るからつて約束して行つたから座敷は明けておかないじやアすまぬ。

花「ねえ、伊之さん、私や、何うしたら宜ほんかろう、本当に困とつちまアわ」

伊「いゝじやねえか、海上さんてえのは海軍の少尉だつて」

花「まだ少尉にやア成らないのさ、候補生とやらで航海して来たんだから、今度少尉になるんだとさ」

伊「それじやア少尉もおなじことよ、お前めえも欲のねえ女じやね

えか、ハイと云つて請出うけだされて見ねえな、立派な奥様と言われてよ、小女ぐれえ使つて楽らくにしていかれるに」

花「またそんな事を云つて、私に心配させて笑つて居るのかい、何うしてお前さんは情がないのだろう、私が真身しんみになつて相談すれば茶かして仕舞つて」

伊「ナニ茶かすんじやアねえが、其の方がお前めえの為ためだろうと思つてよ」

花「なんかというと為ためだくと瞞ごまかして、お前さんが女房にしてやると云つたのは、ありや私をだましたんだね、もういゝわ、そんな水臭い」

とツンと致しますが、眼には早や涙ぐんで居りますから、伊之

吉も黙つてはいられない。

伊「これさ、また怒おこるのか、己おらが言つたことが気にさわつたら堪忍しなせえ、何も悪気あくでいったことじゃアねえんだ、己おらだつて斯こんな様わけになつてるお前めえを海上に渡して仕舞うのはいゝ心持じゃねえが、これも時節だ、仕方がねえというものよ」

花「それじゃアお前さんは何うあつても切れるてえのだね」

伊「切れたくアねえが、切せ角かくお前めえが身儘になるのを己おらが為に身請をうんと云わねえじゃア、お部屋へ濟まなかうじやねえか己おらが、お前を身請するだけの力がありやア、一も二もねえ、海上の鼻をあかしてひけらかして見せるが」

とホツと溜息をつきまするも全く花里の身を思つてくれるから

の真実でございます。斯うシンミリとした話になつて参ると猶さらに悲しくなるもので、花里ももう堪らなくなりましたんで、伊之吉の膝にワツと泣き伏しております。此方もたゞ腕をくんで考えるばかり、智慧どころか中々鼻血も出そうにないので、只だハア〜と申して居る。伊之吉は男だけに、

伊「コウ、泣いたつて仕方がねえつてことよ、今夜すぐ身うけするつてえんじやアあるまいし、一寸のびれば尋ツてえこともあるんだ、左様くよく〜心配して身体でも悪くしちやア詰らねえからなア、まさか間違つたら其の時にまた何とでも仕ようがあらアな、え、何うするつて、何うでも身請されることは否だ、己らの面を潰すようなことをしては済まねえつて、解つたよ」

と元氣は付けて居りますものゝ、花里の心が不愠ふびんでならないが、何分にも手の付けようがありません。それも自分が大芳棟梁の実子であつたなら、又打明けて相談する場合もあるがと思ひ、伊之吉も沈んでいる。励まされて花里は顔をあげましたが、胸につかえて居ることがあるんで浮うき々くは出来ません、兩人ふたりとも無言で、ジツと顔見合みあしておりますと、廊下にバタ／＼と草履の音がいたした。

新「花里さんの花魁え、花里さんえ」

と呼ばれますから、てつきり海上が来たのだなど、ぞくりとして総毛だちまするが、返事をしない訳にはいかないので、

花「あい」

新「おや花魁、此処こゝにいたのですか、人がわるいよ草履までかくして、それも仕方がないわね、伊之さんが来てるんだもの、ホ、ホ、ホ、伊之さんには済まないがね花魁、何うかちよいと顔を出して来ておくんさいよ、お部屋へ知れると喧やかましくつて私らまでが叱おこられなくつちやアならないからね」

花「ハア往いきますよ、いま直ぐ、また来たのあん畜ちきしょう生が」

伊「身請しんじでも為しようてえ大事なお客様だ、早く往いつてきな、畜生ちきしょうなんツて冥みょうり利りが悪わるかろうぜ、ねえはアちゃん左さ様ようじゃねえか」

新「伊之さん、そんな当あたこすりを云うもんじゃありませんよ、花魁もこの事に付ついては何様どんなに心配しんぱいしているか知れないんでほんとに可愛かわいそうだわ」

花「はアちゃんほんとにこの人の人情のないのには」

新「花魁、そう心配することはありませんわ、伊之さんだツて、ねえ」

と新造は双方を慰めて出てまいります。花里は猶往きそうにもしないから、

伊「早く往つて来ねえな、いよ／＼という時になりやア何うともなるわな」

花「あゝ仕方がないね、まさか間違やア私や死ぬより法は付かないと思つているのよ」

伊「ハ、ア、能く死ぬ／＼というな、死なねばならねえ場合ばえにやア一人は殺さねえよ」

花「本当、嘘じやアあるまいね」

そこは稼業でございますから、花里も嫌だと思つていましたつて、まさか脹れツ面もしてられない。座敷へ這入りますと、

花「海上さん何うも済みません、今朝から何処で浮氣してました、何ですね、そんな耄けた顔をしてさ、お金どん一寸と御覧よ、ホ、ホ、ホ、」

と新造の方をふり向きますから、

新「あら、花魁可愛そうにねえ海上さん、そんなことアありやしませんね、花魁の嫉妬も余まり手放しすぎるわ」

花「お金どんは駄目だよ、海上さんに惚れてるもんだから肩を持つのだもの」

海「ハ、ハ、ハ、何を言ってるんだ、僕はな今朝こゝを出ると青山の長官の家へ参り、それから久しゆう行かんによつて上野浅草附近を散歩して」

花「それから吉原へ行つたんでしよう」

海「イヤ、決して参らん、花魁さえ諾といつて呉れ、ば、今夜にでも身請してすぐ宿の妻にする恋人があるんだもの、何うして外の色香に気がうつるもんか、ねえお金どん、左様じゃないか、ハ、ハ、ハ、」

新「海上さんはお世辞ものですよ、その口で甘く花魁を撫でこみ、血道をあげさせたんですね、ほんとに軍艦の方は油断がならないわ」

花「ほんとにお金どんの云う通りだよ、海上さんは口先きばかりで殺し文句をならべ、私見たいな馬鹿が正直にうけて嬉しがるのを、ねえ、蔭で見えておいでなさったら嘸面白いでしようね、だけれどそんな罪を作つては良くはありませんよ、ホ、ホ、ホ、」

海「僕はお世辞なんかを云うものでない、航海前に約束したことがあるから、帰朝すると直ぐお前のところへ斯うして来ておるじやないか、僕が約束通り身請を為しようといえ、何の斯のとお前の方で引ぱつてゐるの、何うも変だぜ」

花「あらまた、あんな厭味ツたらしいことを言つてるよ、この人は、まあお酒でもおあがりなさいな」

と頻りに酌をいたしますは、酔わして寐かそうと思ふからで

げすが、海上も花里の挨拶がにえきりませんから、今夜は是非とも承知させて身請をしよう、大袈裟に身請しては余計な散り銭も出ることではげすから、成るべくは親元身請にいたし、幾分でもこのところを安くと考えていらつしやるんですから、中々お酒も例いっものように召あがらない。新造が傍に居りますときは左様そうでもありませんが、差向いになると身請の相談で、ひそくと囁ささいているのは誠に親密らしい。斯うなつてはお座敷が長く容易に引けませんので、花里は気が気ではありません、海上を寐かせておいて直ぐ伊之吉の名みょうだい代へ参ろうとぞんじて、これでは果しがつかないから、

花「ねえ海上さん、こんな相談をするには緩ゆるくりしなけりやア

落付かないから、あとで」

海「ウムそれもいゝが、何をいうにもお前が全盛な花魁だから、中々ゆる／＼話してることが出来ないじゃないか、少し話しかけると廻しに出ていくしき、おばさんが迎いに来るかとおもえば、また拍子ときで出られるしよ」

花「そりや勤めの身だから仕方がないわ、私がいくら貴方の傍にばかり居たくツたつて、お部屋やかまで喧やかましいから堪忍して下さいよ、ほんと本当にそれを言われるといかにも不実でもするようほしめで済まないが、こんなものでも女房にしてやろうというお思召ほしめがあるんだからねえ、私だどんなッて何様に嬉しいか知れやしませんわ、あなたが浮気ツぽいからそれが今からの取越苦勞になつて、末が案じられるん

でねえ、海上さんとつくりお前さんの心をきいた上でなくツチャア」

とじろりと見ますれば、お座なりで言われているとは存じませぬ海上渡さん、熱心に花里の言葉をきいていらツしたが、道理もつともとお思召したやら、うなずいてお出いでになるはしめたと、

花「海上さん、まだお酒をめし上りますか、もういゝでしょう、折角話を為しようと思うところにグウ〜寐られて仕舞っちゃア、ホゝゝゝ」

海「ハゝゝゝ、何うして寐られるもんか、床番させられても起きとるわ」

花「それじゃアお引けにしましょうね」

ポン／＼と手をならしますと、新造がかけて参り、

新「何うもすみません」

花「お金どんお引けになりますから、海上さん便所はゞかりに行きませんか」

海「あゝ行つてこようよ」

新造はあとを片付けながら、若い衆しゅに床をとおして展のべさせます。客と花魁が参るころにはちやんとお支度が出来ておると云う寸法。馴れたことゝは申しながら、まことに手際なものでございます。さアねんねという一段に相成り海上はころりと転がりました。花里はなか／＼容易には寐ません。枕元で煙草の二三服のみました上、つつと立って今度は自分が便所はゞかりにまいる。この

間がなか／＼永いもので、漸ようよう／＼再びまいりましたが、また煙草をのみつゝ。

花「海上さん、すまないがね、今一組あがつたから一寸ちよいと顔を出してくる間まつてゝ下さいよ、ほんとに為しようがないことねえ」

海「あゝ行つて来なとも、情人いろおとこがきたのだらう、早くいつて遣るがいゝ、ハゝゝゝ」

花「憎らしいよ海上さんは、そんなに浮うわ々してるから、先が案じられるツてえのですわ、つめ／＼しますよ」

と肩のあたり一ひとつ捻つねりに、

海「あいた、酷ひどいな」

花「まつてゝ下さいよ」

と言葉をのこして我部屋を出ればホツと息つきましたが、この夜は到頭寐転しをくわせられ不平でお歸りになり、其の次の夜もくく同じような手でうまく逃げられて、何うも身請の相談をまとめることが出来ない。それから致して考えて見ると、花里の言うことゝ行ることゝ些とも合わないから、ハテ訝しいぞ、口では身請を喜びながら心では嬉しがらぬのだな、情夫でもあるのではないか知らん、左もなきときは、誰もかゝる稼業を好んでするものはないに、と気が注きましたから段々様子を探って見ると、伊之吉という情夫のあるので、海上さんも切齒をなされ、えゝ知らざりし彼が言葉のみを信じて身請まで為しようとしたは過りであつた、併し男子が一旦この女を妻にと見込みながら、情夫があるからと

云つてやみく／＼手を引くは愚のいたりである、貞操全き婦人というではなし、高が路傍の花、誰れの手にも手折るに難からざるものだ、この上の手段は彼女を公然身請して、仮令三日でもよろしい我物にすればそれで気はすむ、最早親元身請などの吝嗇くさいことは云わぬと、妙なところに意気味を出されたもので、海上さんは直接に花里身請のことをお部屋へ懸合われました。お部屋では利分のつくことでございますから、二つ返事で承知いたし、花里の身代金三百五十円にて相談が極りました。これが昔でございまして、本人が何と申そうとも、楼主の压制で身請させて仕舞うのでですが、当今の有難さは金を出して抱えている娼妓だと云つて、楼主の自由にするには出来ません。本人が承諾しなければ

ば自儘じまゝに人身売買をしてはならん。ところでお部屋からは嘯んで
 ふくめるように花里へ説論せつろんしますが、何うしても諾うんとは申しませ
 ん。当人はいやだといひ客からは何うだくと催促されますの
 で、実はお部屋でも弱りきつて持てあまし、と申して見すく儲
 かるものを当人がいやだというからつて其の儘にしては、後々のち々
 他はたの娼妓しょうぎに示しがきかぬ。脅おそしてなりとも花里にさえ諾といわせ
 れば、それで此方こちらの役目はすみ、お金にもなることゝ、慾が手伝
 いましたは義理人情も兎角そぼうに外ツ方へよつて仕舞うもので、お部
 屋からの言付けだと、伊之吉は到頭はきものお履物はきものにされまして二階を
 せかれ、花里は遣手やりて新造までにいろく意見させて見ましたが、
 いつかな動きません。強情にも程のあつたものだ、とお部屋でも

今は憎しみが掛り花里は呼付けられます。小言をきくは覚悟の前で、今日は何なんといつて言訳をしようか、たゞ厭とばかりは申すことが出来ない、何ういい抜けをして逃のがれようかと心配しますれば、胸も痞つかえて一杯でございます。

楼「花魁、こゝへ来なさい、何もそんなにうじくしてることはないから」

花「はい」

とは申しますものゝ窃そつと楼主の顔をみますれば、何なんとなく穩おだやかでない、幾いくたび度となく身請のことを口を酸ツぱくして論しても、花里は諾うんと申さないから焦じれているんで。随分娼妓こども達には能くしてやる楼主でございますが、花里のように強情ばかり張って申す

ことを聞き分わけませんから、今は意地になつて居ります。抱しよえ娼う妓ぎに斯ぎう我儘がらをされるようでは他はたへ示ししが付かぬ、何うにでもおし圧おしつけて花里を身請させねばならぬと申す気が一杯でげすから堪りません。これを見ると花里はゾクリといたし襟元から水を打掛ぶっかけられるような気がする。そうすると直ぐ悲しくなつて眼には涙を催もよほしてまいります、坐らない訳にはまいりませんから、針むしろの筵むしろにいる気で楼主の前に坐り下を向いたまゝで顔を上げない。

楼「花魁、この間から度たび々々という事だが、お前海上さんの方へ何う御返事をする積りなのだえ、よく考えて御覧、いつまで斯こんな稼業かせぎをしているが外見みえではあるまいしね、お前とて子供ではなし、それぐらいのことはよく分るだろうが、それにお前の気では

あの青二才の伊之吉と約束があつて情を立てる積りだろうがね、それは大きな間違というものだ、近いところが此楼こいにいたあの綾あ衣やぎぬがいゝお手本だよ、あんな夢中になつて初はつさんのところへ行ゆき、惚れた同士だから嘸さぞ中なか好よく毎日暮すだろうと、楼うちじゆう中の羨うらやみものだツたは知つているだろう、それが御覧なさい、物の三日も経たないうちから喧嘩する、末はどうとう夫婦別れして綾衣は今じゃア新造衆になつてるじやないか、又瀬川せがわはいやだくと云いながら、お前と同じように痺しびれを切らした末が、海軍の方に身請されたが、今じゃアお前、横須賀で所帯をもち、奥様といわれ立派になつてるよ、まア物ものごとは凡すべて左様そういうものでね、この稼な業かで惚れた腫れたで一緒になつたものは兎角お互に我儘が出て、

未始終を添い遂げられるものでないからね、お前もよくそのところを考えて海上さんに身請され、氣樂に暮すが当世だらうぜ、え、花魁、何うだね、分つたらうね」

花「はい」

楼「分つたら、身請されて廃業するだらうね」

花「旦那さんを始めとして皆さん方も、いろ／＼と御親切に仰やつて下さいます、こればかりは御勘弁遊ばして、何うかこのまゝ」

と申しながら、はや得堪えたえずなりましたやら、ワツと泣き伏しまするので、楼主もいよく呆れ、強情にも程のあつたものだ、其の身の為を思つて意見してやるを無にして我がを通そうとするが面

にくいといらくとして参つたので、常にはなか／＼思慮ある楼主でげすが、斯うしたときは我を忘れるもので、傍かたわらにござりました延のべの長煙管を取るも遅しと、花里を丁々と折せつかん檻かんいたします。これが此のごろのようにならない前の花里なら楼主がそうした乱暴をする氣遣いありません。また他はたのものも直ぐ駈けつけ参つて詫言もしてやりますが、何をいうにも伊之吉へ一心を入れて情を立てる為あくに飽あまで強情をはり、他人ひとの意見を用いませんで憎にくかられているときでげす。誰だつて止めるものはない。花里は散々に打ちようちやく擲やくされて悲鳴をあげていましたところへ、ばた／＼と駈かけて参つたものがござりますので、楼主もハツと氣つが注ついて手をとゞめ、

楼 「だれだえ、其処そこへ来たのは」

小 「はい、私でございます」

楼 「そういう声は、小主水じやアないか」

小 「はい、その妓このことで、旦那さんに少々おねがいがござりまして」

楼 「花里のことでおねがいただと、花魁、それは廃よしてくんな、こんな強情ものに口をきいてやったツても心配の仕甲斐がないからね」

小 「そうではございましょうが、もとは私の部屋から出したもの、旦那さんや皆さん方に御苦勞をかけるがお気の毒、今までは出しやばッてはと控えていました、もう何うも引込んでいられ

ない今日の様子、何うか一応は私にお任せなすツては下さいませまいか、及ばずながら意見をして見ましよう、皆さんの御意見でさえ柔順すなおにいう事をきかないんですから何うで駄目でしょうけれど」

と小主水が様子あり気な取なしでげすし、殊にこの花魁の言うことは、元世話になったと花里は一目も二目もおいておりますから、楼主も承知いたし、

楼「それでは小主水の花魁、お前に預けますから、何うか意見をして遣つて下さい、私わしもこの妓こが悪にくうて折檻までするのではないからね」

小「旦那さんの御親切はよく存じて居ります、花里さん何うし

たんですよ、ほんとに困りますねえ、さア私と一緒ににお出でなさい」

泣き伏しております花里の手を引いて小主水は己が部屋へ帰りました。花里はよう／＼にいたして涙をはらい、

花「姉さん何うも済みません、とんだ御心配をかけましてねえ」

小「済むも済まないもありやしません、花里さんお前さん全体何うする気だい、この身請にどこまでも楯ついて強情を張り通すつもりかい、そりや伊之さんとの交情もよく知っているから、今までは他の人達が何のかのと言つて意見しているのを知らず顔でいたんだがね、今日のように内所で折檻されるを何うも見てはいられないから、疾くとお前さんの了簡をきいた上で、ねえ、

また膝とも談合というから話し敵かたきにもなるつもりなの、些ちつとも遠慮することはないから、本当ほんとのところを言つてきかせて下さい、私は何でも内所のいうなりにお成りとは言わないよ、海上さんの身請いやが否いななら、否いなのようにまた為する仕方もあるだろうからね」

花「有難うございます、本当に済みません」

と又泣きくずおられます姿を見るにつけ、其の心の中うちを推量致すと小主水も可愛そうになつて堪りません、命までもと入揚いりあげております情人おとこは二階を堰せかれて仕舞い、厭な客に身請いされねばならぬのでげすから、我身も此様こんな場合にあつたら矢ツ張りこの様に意地を立て、どこまでも情人の為に情を貫ぬくかも知れぬと思ひますと、何うも花里に同情を寄せられるような気がいたし、胸

もふさがツて参り、何なんとも意見の仕様がございませぬ、暫らくはジツと見詰めていましたが、それも憐いじらしくて見ていられぬ。泣なごえを立てじと忍びまする度たびに根のぬけた島田ががくりくしてふる顫ふるいますから、何うも身請をすゝめる事の出来ないばかりじゃアございませぬ、感情に制せられては他人ひとのことで涙が浮いてまいり、横を向いて仕舞いしましたが、それでも気にかゝりますので、またちよいくと花里の泣伏す姿を見て、目を数しば叩たたいておりましたが、左様そう何時までも黙っていたとて際限がないと、

小「ねえ花里さん、じゃア何うしても海上さんのとこへは行きゆませんね」

花「姉さん、すまないが堪忍して下さい」

と申したきり、また小主水も花里も無言でいましたが、花里は何なんとも思いましたか、顔をあげて涙をはらい、

花「姉さん、私は諦めました、いろいろ御心配をかけて、とても伊之さんと添うことは出来ずまいから」

と云ううちにまた眼には一杯の涙がたまりましたを襦じゆばん袷の袖でふき、ホツと溜息つき、力なく、

花「仕方がありません、海上さんに身請されますわ、今までいろいろとお世話になりました、御親切にして下さった御恩は決して忘れません、ナニ私があの人に義理さえ欠いてしまえば、それで何事もありやアしませんわ、ほんとに姉さんの御恩は」

と合掌しますので、小主水は花里の様子に目もはなさず見てい

ましたが、我知らずほろりくと涙をこぼしているに、花里もこれに誘われましたか、また突伏つつぶして仕舞いました。小主水は一層そば傍へすり寄つて、

小「花里さん、お前さんは、其の了簡はわるいよ、短気を起しては」

花「いゝえ、決して」

小「お隠しでない、お前さんが三日でも海上さんのところへ行つていて駈出すような気なら心配はしないが、仮令たとえ一日でも、伊之さんへ義理立てをするんだから、諦めたと言いなさるは死ぬ気でしよう、そんな短気を起しては宜よくないよ、それも無理とは思わないが、突詰めたことすれば伊之さんだつたつて、あとで何様どんなに

悲しがんなさるか知れやアしないわ、死ぬ気で、ねえ花里さん」
 花「それだから海上さんのとこへ行くつもり、そうすれば御ご内所ないしょでも」

小「まだそんな事をいつているよ、私にまで隠して、何うでもお前さんは死ぬ気かえ、これほど為を思い、お前さんの心を察して言つてあげるのに」

と小主水は少しくムツとして見せますれば、花里は猶更かなしくなり、摺寄つて小主水の膝に獅噛しがみつ付きますのを、払いのけ、

小「本当に分らないにも程があるじゃないか、私にばかり口を酸すぱくさしてさ」

花「姉さん、私何うしよう、姉さんに左様そいわれツちまやア、

仕方がないじゃありませんか」

といよ／＼突詰めた様子でげすから、小主水ももう仕方がありません、この上は打捨うっちゃつておけば大騒ぎになるんですから、ま／＼不愆ふびんは加わりません。こんなな思っているんだから、せめて一日でも伊之吉に添わしてやりたいと思案にくれましたが、やがて花里の耳に口をよせ何事でございますか囁ささきます。

花「姉さん、何うも」

小「いけなかつたらそれまで、まア遣つて御覽」

エー和国楼の花里は姉と立てゝおりまする小主水の意見に従いましたことのでげすから、いよゝゝ身請される相談が極り、今夜は海上がお金を持ってまいり、楼主に渡して引き祝いに朋輩を総仕舞にいたし、陽気に一花咲かせる事に相成りました。花里も進まぬながらそれ／＼と支度をいたせば、小主水もいろゝゝに世話をやきまして、傍^{わき}から注意いたして居ります。朋輩女^{じょうろ}郎たちは年期で出るでなく身請ときいては羨ましいので、入り替り立かわり、花里の部屋へまいり名残を惜むもありますれば、喜びを申すもあります。また廊下などで立話をしているをきけば、

○「いよゝゝ花里さんは、海上さんのとこへ行く^ゆツてねえ、今夜が身請になるんだツて、本^{ほん}当にうらやましいわ、私や花里さん

が出たら、あの部屋へ越そうと思ってるのよ」

▲「私だつて覗ねらつているのさ、本当にあの座敷は延喜えんぎがいゝか
らねえ、瀬川さんだつてあの座敷から身請されたのだし、今度の
花里さんだつて矢ツ張りなのだから、それに二人とも海軍の方だ
ものねえ」

×「花里さんの廃ひくのは瀬川さんたア一緒にならないわ、あんなに
血道をあげてる伊之さんてえ情人ひとがあるんだから、海上さん
は踏台にされるに違いないのよ、何うして花里さんが伊之さんと
切れられるものかね、また無理もないから、男ぶりも好よく厭味いやみツ
気がないのだもの」

△「ハクシヨ岡惚おかぼツてるよ、この人は」

□「何うも憚りさま、花里さんが出て仕舞えば伊之さんは私が呼ぶのよ、その時にやア屹度おごるからね、ホ、ホ、ホ、」

○「馬鹿にしてるよ、本当に」

なんかんと風説うわさしております、そのうちに張見世はりみせの時刻になりましたが、総仕舞やえで八重ぎよくの揚代ぎよくが付いて居りますから、張見世をするものはございませぬ、皆海上の来るのを待つてゐる。併しかし外のお客を取らないというのではありませぬから、初会でも馴染でもお客のあるものはずんく取つてゐる。その家々うちくの風ふうで変りはありますが、敵娼あいかたの義理から外じよろうの女郎じよろうを仕舞わせるほど馬鹿々々しいものはありますまい。それぐらいなら溝どぶの中へ打捨うっちゃる方が遥かましでしょう。何うも済すみませぬとか有難うござるとか

いう一口が揚代一本になるんですからねえ。それも仕舞ってやつたお客には何の挨拶もするでなく、その娼妓が紅梅なら、紅梅の花魁へのみの会釈でげすから癩にさわるじやありませんか。とんでもねえ鼻ツたらし扱いされるんでげすから、併しあの場所へ浮れてお出で遊ばす方はそんなことに御頓着ごとんじやくはなさらぬものでな、お気に召した花魁でも参り、程のよいお世辞の一つも言われると、土砂をかけた仏様のようにお成んなさる。余事はさておき、意地を張って身請を拒みました花里も、小主水の説得に伏ふくしていよ／＼廃業すると申しますので、海上渡さんはお鼻が高うございます。意地ばつて楯をつくころは女の小面こづらを見ても腹が立つものだそうですが、さて先方さきから折れて出れば元より憎い女でない、廃ひきい

業祝わいには当人の顔は勿論でげすが、廃業ひかせるお客海上の顔にもかゝるんですから、立派にして遣らねばならぬ、立派にしてやるが青二才の職人風情に真似の出来るもんか、己と競争し為ようと思つたツて到底とても及ぶまいと、大奮発おほりこみでございます。花魁花里が廃業祝の支度とゝのい、もう海上さんがお出でになるころと待ちうけて居ります。路傍の花いまゝでは誰たれ彼れの差別なしに手折たおることが出来る、いよく花里の身があがなわれて見れば、なか／＼自由にはなりません、主ぬしあるお庭の桜でげす。手でも付けようものなら、それこそ大變がおこるツていうような訳となりますんで。彼の情人いろの伊之吉でげすが、エー、花魁は決して海上になびく氣遣いはない、まかり間違えば死のうとまでしたんだから、そ

れに文ふみの模様では小主水花魁が相変らず親切しんみに真身しんみになって世話をしておくんなさるてえから、大丈夫だ心配することはないが、何うも気になってたまらんよ、ゆうべ小主水花魁から届いた文のように旨くゆけばよいが、そうは問屋といやでおろしそうもないて、ひよつと仕損じて花里さんえ何処どこへ往ゆくんです、さアお座敷へお出でなさいよと云われた日にやア仕方がない、いかに小主水の花魁でも斯うなつたら何うも仕様があるまい、事がグレ蛤はまとなつた時は馬鹿を見るのが己おひら一人だ、あれもいや／＼海上に連れられて行くゆ、イヤ／＼假令たとえつれられて行けばとて無事むじでいる氣遣いはない、花里あれの性質はよツク知しっているが、己おひらを袖そでにして生きてはいぬ、が、花里あれとても素人じやアなし、多くのお客きやくに肌身をゆる

し可愛かわいのすべツたのと云う娼妓だ、いくらあゝ立派な口をきゝ、飽まで己らに情をたてると云つてゝも、フイと氣が變つて海上に靡なびかないとも限らないから、と頻しきりに考え込んでいるのは伊之吉でげすがね。花里が小主水の差さしがね金で身請を諾たくしますと直ぐ、伊之吉の許もとへ品川から使い屋が飛んでまいつた。此のごろは二階を堰せかれているんでげすから、折々花魁から使い屋をたてゝ文の遣や取りりに心を通じている場合、何か急な用が出来て花里から使い屋をよこしたのだと思いますと、小主水からの使いで、文面を読むたびに恟びつくりばかりいたしましたが、親切こまに細々書いてあるから伊之吉もその通りにいたし、身請の当夜を待ち、指図のごとく一艘の小舟を借りまして、宵の口から品川の海辺に出で汐を見ま

すと、丁度高潮まわりで段々と汐のさしてまいる端はなでげすから、伊之吉喜び勇みまして、舟を和国楼の石垣のそこへつけ、息を殺して潜んでいたのでございます。すると夜風は身にしみて肌さぶく相成り、二階ではお酒が始まり芸妓げいしやが騒ぎはじめますから、馬鹿々々しくなつて堪りません。舟底にころりとやつて居りましたが、気が揉めますから、首をあげて二階を見ますと、障子にヒョイ／＼男や女の影法師がうつる。またはワーワツと笑いごえの致すのが、自分を嘲ちやうろう弄するようにも聞き取れますんで、いろ／＼の考えをおこし、ムシヤクシヤしてまいる。左様そうかといつて自分は忍んでいる身でございますから、うっかり頭をあげたり舟を動かすことは出来ません。若もしも石垣へばしやり／＼波があ

たつて楼中で気が注つかれて見ると、百日の説法も屁一つになるん
 でげすからな。その心配というものは容易でありません。伸びつ
 反そりついたして楼内うちの様子にばかり気を配つて、此処こゝへ舟をつけ
 て待つていてくれるというからは、屹度花里が忍んで出てくる手て
 段だてに違ちがいなかろう、小主水の花魁は天あつ晴ばれ男まさりの働きがある
 女だから、万に一つも遣り損じはあるまいが、何をいうにも大勢
 の人の目を掠かすめて脱ぬけ出させるのだから旨く行つてくれ、ば宜い
 がと、庭の方で足音でもしはせぬかと、そればかりに耳をたて、
 おりますが、さつぱり足音もしない。二階ではいよゝゝ大騒ぎで、
 陽気になつてまいる。すると花里々々ところえがチラリ／＼と聞え
 るので、また一層の苦になつて堪りません。エ、詰らない馬鹿々

々しいや、斯うして心配しているのに彼女は、あの仲間にはいつて笑っているかも知れんと、水上警察の巡廻船に注意いたしつゝ、そつと首をあげまして石垣につかまり、伸びあがつて楼内うちの様子をうかゞつています。と、庭は真闇まっくらでげすから些ちつとも分りませんが、海面に向つてある裏木戸のところ、コツリガチャリという音がするので、伊之吉は恟りいたし伸した首をちぢめ、また舟の中に小さくなつている、錠でも外すような音がよく、耳につきますから、またそつと伸びあがつて木戸のあたりを透すかして見ますると、暗夜やみで判然はつきりとは分りませんが、何なんだか白いふわりくとしたものが見えました。それから熟よく耳を澄すましてきゝますと人の息をするようですな。ハテ来たなと思えますから、怖こわ々々

石垣の上へあがりはらばい匍這はになつて木戸のところまで匍はつてまいり、様子をきゝますと内のものは外に人がいると知りません模様で、しきりに錠を外そうといたしておりますから、伊之吉も今時分こゝへ外ほかのものが来る筈はないとぞんじ、静かに木戸わきの際へ立ちよりまして、

伊「花魁かい」

と声をかけました。大抵なら先方さきでも恟りするんですが、そこは約束のしてあることとでございませう。先方でも些ちっとも驚いた模様もありませんで、

花「伊之さんですか」

と焦じれてガチリと音させ、よう／＼錠をはずし木戸をひらき、

出てまいりますと、只何にも言わず伊之吉に取りすがつて顛くるえて
 おります。伊之吉とてこんなことを遣るは臍へその緒きつて始めての
 芸で、実は怖おっかな悔りでおるんですが、何なんと云つてもそこへま
 いると男は男だけの度胸のあるもので、

伊「これ、折角斯うして逃げ出したもんだから、早くこの舟に
 乗んねえな、ぐずぐずして見附けられた日にやア、虻蜂とら
 ずで詰らねえからな、エ、もうちつとだ確しっかりしねえな」

と小声で申しながら、花里の手を取つて、怖おっかながるをようく
 舟にのせましたので、まアと一安心いたしましたとが、早くこゝを
 遠とおほし走とつて仕舞わないと大変と存じますから、花里には舟底のと
 ころに忍とまばせ上から苦とまをかけまして、伊之吉は片肌ぬぎかなんか

で櫓ろを漕こいで、セツセと芝浜の方へまいります。それも燈火あかりがな
 くては水上の巡廻船とがに咎とがめられる恐れがありますから、漁師が夜
 網あみなど打ちにまいるとき使う、巡査おまわりさんが持つていらつしやる
 角かく燈とうのようなものまで注意して持つてきているから、それに燈あ
 火かしをいれて平気で漕いでまいりました。いまは品川も遙かあとに
 なりましたから、ホツと息をつき、

伊「花里さん、もう些ちっとだから辛抱しておいでよ、ちよいと首
 を出して御覽、品川はあんなに遠くなつたから、此処こゝまで来れば
 大丈夫かね鉄わらじの鞋おひだ、己おらは強えらくなつたぜ」

花「そう、本ほん当とにすまないことね、お前さんに此様こんな苦勞なまでか
 けてさ、堪忍して下さいよ、これも前世からの約束ごとも知れ

ないわ」

伊「何も礼をいうことアねえや、お互えたげに斯うなってるんだから」

花「今度の事には姉さんに、まあどんなに心配をかけたか知れないので」

伊「そうよ、小主水姉さんには本当にすまねえが、実に彼あの人は兩人ふたりが為には結ぶの神だよ」

花「はア本当にそうですわ」

伊「兩人おちつが落著いたら何うしてもこの恩を報かえさねば、畜ちきし生しょう

にも劣るから、己おれらは」

と跡言いひかけまするとき、ギイ〜と櫓壺きしの軋しる音がして、燈火あかし

がちらりくとさす舟が漕ぎまゐります。伊之吉は俄に花里を制し、また元の如く苦を冠かぶらせてしまいました。さて和国楼でございいますが、肝腎かんじんの花里がいま身請の酒宴さかもりと申す最中もなかに逃亡いたしましたんですから、楼中の騒ぎは一通りではありません、上を下へとゴツタ返して探しましたが、中々知れそうな理由わけはありません。まさか伊之吉が舟を持って来て連れていったとは知れよう筈がない。海の中にいるんでげすから陸おかを探したとて跡のつく氣遣いなし。海上も一時はカツと怒いかられて、外のものに当り散らしては見たが、相手のない喧嘩は何うもはえないもので、到頭そのまま泣き寝入で、只ただ器量を下げたお引下がりになりました。併し和国楼では、花里に逃げられたから、それで宜よいわと済まされませ

んから、それ／＼の手続きも致さねばならぬ、品川警察へ逃亡のお届けをいたし、若しや伊之吉のところへ参つて居らぬかと、追手を出して探させましたが、さっぱり解らず、伊之吉は平生につね変つたこともなく、此の頃では仕事場へも出まして稼いでおりますから、何うしても手懸りが付きません。品川警察へ呼出されてお調べに相成つたこともございますが、伊之吉の申し開きは立派にたち、放還になつて見れば花里の行方はます／＼手懸りが切れたようなもの。たゞ和国楼の庭口の木戸のあいていたというところで、海中へ身を投げて死んだのであろうと評判でございました。ナニ伊之吉がちゃんわきと他へ隠してあるのが知れませんが、不思議なもので、お取締りは随分嚴重になつて、コラお前うちの家には同居

人はおらんか、と戸籍調べのお巡査まわりさんはお出遊いでばしても、左様そう
 重箱の角までの世話の届くものではありません、早いところが我
 々どもの家でさえか、あ左衛門が、ちよいとホマチを遣るのを主人あるじ
 が知らずに居おることは幾らもあります。これは、何うもはや、読あ
なたがた者方の御新造様が決して左様さようなさもしいことを遊ばす氣遣いは
 毛頭もうとうございませんが、我々仲間の左衛門さえもん尉じょうには兎角うさぎありがち
 のことで、亭主に隠して焼芋でも買うお鳥目をハシけるは珍らし
 くないことな。イヤこれは余計な贅むだごと言を申し上げ恐れ入りま
 す。兎に角、花里花魁の行方は知れずに月日は経ちました。

神奈川在の甚兵衛夫婦をたよりてまいりました、お若伊之助でございます。甚兵衛夫婦も疾とく世を去り、月日はいつかふたむかし 昔をすぎまして、二度目に生れた岩次と申す息子も十八歳と相成りましたくらいでげすから、お若さんも年を取りましたな。皺は一杯額に波うちますし、髪の毛は薄くなる、昔の面影はありません。それに永く田舎に燻くすぶっていたんだから、まことに妙なもので、何う見ても田舎ものでげすツて、伊之助もその通りで、何事もなく暮していましたが、さて何となく気にかゝつてなりませんから、お若さんも伊之助と相談いたし、兎に角伯父の高根晋齋が生きているうちに詫わびごと言せんと、久し振で東京へ出てまいり、まだ鳶頭かしら

の勝五郎も生きてゐるに違ひないからツて、尋ねてまいりましたは下谷の二長町にちようまちでげすが、勝五郎の住すまつていた長屋は矢ツ張りございますんで、お兩人ふたりはヤレよかつたと喜び、台所口からのぞいて見ると、朝のことではげすから勝五郎は火鉢のわきで楊枝をつかつてゐる、自分の年をとつたことは分りませんが、他人ひとの老けたのは能くわかるもので、

若「ちよいとお前さん御覧なさい、鳶頭も大層年をとりましたことねえ」

伊「成程すつかり胡麻塩になつちまつた、己おいらだツて他人ひとから見ると、矢ツ張り爺い婆アになつてゐるんだよ」

若「本ほん当にそうでしょうねえ、神奈川へ行つたのも昨日今日の

ように思つてるが、二十年ふたむかしにもなるんだからねえ、高根の伯父

もさぞ年をとつたでしょう、まさかもう頑固もいいますまいよ」

伊「岩の手前てめえも面目ねえや、ハ、ハ、ハ、そんな事を言つてたつて

始まらねえ」

と伊之助が訪おといまして、神奈川在からお若と伊之助が尋ねて参

つたと申すと、楊枝をくわ啣くわえておりました勝五郎は恟りいたし、台

所へ飛んでまいりふたり兩人の顔をしげくとながめました、急に眉

毛に唾をつけますから、お若さんは、

若「鳶頭、何うも久し振ですなえ、お前さんも相かわらず御丈

夫で何よりですよ、先年はいろくお世話になりましたねえ、本ほ

当んとにすみませんでしたこと、今度こうして兩人でお宅へまいつた

のは、あれを見て下さい、あのようになった息子までも出来た夫婦ですから、是非お前さんの袖にすがって伯父さんにお詫をしていたゞき、永らくかけた御苦勞の御恩を返そうとおもつてね、それで態々わざわざ来たんですから、鳶頭どうか、お前さんより外に頼むものもないんだからお願い申します」

伊「今お若からも申すとおり、お前さんが夫婦の手引きだから、面倒でもあろうし、先頃お前さんの意見をきかなかつた腹立もあろうが、ねえ鳶頭、何うか昔のことは言わずに一肌いれて下さい」と頼みまする様子に勝五郎はいよく悔りいたし、開いた口は塞ふさがりません。と申すはお若さんでげす。再び伊之助と腐れ縁が結ばりまして、とんでもない事になるところを根岸の高根晋齋が

家へ引取られましてから、病気で一歩も外へ出たことがござい
ません。今でも現に晋齋のところにはぶら／＼としてゐるんですか
らね。元より大病というではありませんから今はお医師にもかゝ
らず、たゞ気まかせにさせてあるんで、尤も最初のうちは晋齋も
可愛そうだと思召し、せめて病気だけは癒してやろうと、いろ／
＼のお医者におかけなされましたが、さっぱり効験がない。お医
者にかけてないからツてドツと悪くなるでもありませんから、二十
年から鬱々と過してゐるんでげす。さア左様いう風でございま
すのに、また一人お若さんが出来て、子供までつれてお出なされ
たんですから、鳶頭の驚きまするは当然で、幾らくびを曲げ
眉毛に唾をつけましても、その理由はわかりません。こいつは不

思議だぞ、さきに根岸では伊之助が二人出来た例ためしもある、こんどはお若さんが二人になったは不思議だ、これは何れいずか一人のお若さんは屹度変化へんげにちがいない、併し根岸の高根晋齋先生のところにござるお若さんが、ヨモ変化である筈はないことだ、そうすると今伊之助と一緒にまいつているお若さんが訝おかしい、斯う考えて見ると伊之助も変化かも知れない、根岸で先生がズドーンとやつた狸たぬこ公が、ア、それに違いないと、ぶるくつと顫ふるえあがるのに、お若も伊之助も呆氣にとられてこれも茫然ぼんやりいたしてしました、何時まで睨にらみツこを致していたとて果はてしがありませんから、若「鳶頭、お前さんは矢ツ張りわたし等を憎んで、この願いをきいては下さらないのですか」

勝「なに、そんなことじゃアござえませんが、何うもおつり
きで」

若「エ、おつりきとは、そりやなんの事で」

勝「なにさ、それは此方こうちのことで」

と申しながら不承不承請合いまして、下谷二長町からドン／＼
根岸へやってまいりました。高根晋齋は庭に出て頻りに掃除をな
すつていらつしやいます。そのお座敷は南向でございますから、
日が一杯にあたつて誠に暖かあつたでげすから、病人のお若さんも縁側
へ出て日向ひなたぼこりをいたしながら伯父さんと談はなしをいたしておりま
すところへ、書生さんがお出でになりました、

書「エ、先生、先生ツ」

晋「なんじや」

書「鳶頭の勝五郎がまいりました、至急お目にかゝりたいと申します」

晋「左様さようか……こちらへ通しなさい、また何かそゝツかしやが詰ちらぬことに目を丸くしてまいッたと見えるな、彼あれも若い時分から些ちとも変らないそゝつかしい奴だが、あんな正直な人間もすくないよ、稼業柄しごとに似合わない男だ」

と仰おやりながら、ポン／＼と裾すそをはたいて縁側へお上りになり、ますとき、永ながのお出入で晋齋先生のお氣に入りでげすから、勝五郎はずか／＼とおくへまいりまして、そこに出ておいでなさるお若わかさんを珍めづらしそうにながめ、何なんだか変へん挺ていの様子で考え、まこ

とに茫然ほんやりといたして居ります。

晋「鳶頭か、よくお出でだね、お前何か心配なことでもあるのか、大層かんがえていなさるね」

勝「先生様、奇体きてえなことがおツぱだかつたんで、またね、狸たぬこ公うがお若さんに化けてめえりやしたぜ」

晋「オイ、鳶頭は何うかしているよ、お前おかしな事をいうねえ、気を落付けてゆつくり物を言いな、些わとも理由わけが解らないじゃないか」

勝「それがね、先生大変なんで、今狸公のお若さんが、あの伊之助野郎と一緒にわっちうち私の家へ来ているんですから、変挺じゃげえせんか」

晋「何だなんと……狸のお若わかしが伊之助と一緒に前まへのところへ来た、ハ、ハ、ハ、馬鹿をいいなさい、お前まへ寝惚ねぼけているんじゃないかい、そんなことがあるものか」

勝「ソ、それがね、全くなんで、全くお若わかしさんが伊之助をつれ、若い男おとこまでも引張ひきちつて来きているに違ちがいなんでげす、先生せんせいにお詫わをしてくれくれッて」

晋「ハ、ハ、ハ、いよいよく訝おかししいよ、お若わかしはここににいるじやないか、殊ことに二十年にじゅうねん来の病やま気で外出でしたことことのないものがお前まへの家うちへ行ゆくわけがないよ」

勝「さアそこだそこッて、それだから狸公ねこだ、てつきり狸公ねこにちがいないんで、よく化まけあがあったな、ナニようがす、先生せんせい、貴方あなたさ

まが根岸でパチンとおやんなすった短銃ピストルはあるでしょうねえ、それを私わっちにかしておくんなせえまし、今度は私がパチンとやって遣るんだ」

と急あせり切つて前後不揃ぶぞろいにお若伊之助のまいった次第を話しますので、晋齋も不審には思いますが、自分に遇あつて詫しを為ようと申すは不測ふしぎな理由わけ、ことに子供まで出来十八九ともなつていとは解らぬ事だと、目を閉じて考いえてお在いでになると、勝五郎は短銃を貸せ、打つて仕舞うからと急せきたてます。晋齋は最早八十からお成り遊ばす老人でいらつしやるが学問もなか／＼お出来になる偉いお方でございますから、先ずお若伊之助と名のるものに面会いたした上で、その者等が様子とを篤くと見極めてもしも変化のもの

のなら、なんの年こそとつていれ狐狸こりに誑たぶらかされる氣遣いはないと、御決心あそばしましたから、

晋「勝五郎、まアそんなに無闇なことをいたしてはなりません、私わしに遇いたいと申すなら遇つてやりましょう、つれてお出でなさい」

勝「へー、先生様は狸公にお遇いなされますか」

晋「イヤ狸であろうと狐であろうと、遇いたいと申すものには遇つてやりましょうよ、ぐずぐず言わずに伴つれてお出でなさいよ」

勝「へー、伴つれて来いと仰しやいますなら伴つれてまいりますかね、若し途中で私わちをばかして蚯蚓みづのおそばや、肥溜こいだめの行水なんぞつかわされはしますまいか」

晋「馬鹿を云いなさい、人間が心を臍下に落付けていさいすれば決して狐狸に誑ばかされるものでないから」

と説諭せつゆされましたので、勝五郎は彼の尋ねてまいったお若と伊

之助、それに忤せがれの岩次をつれて参りました。高根晋齋は三人の親

子を奥へ請しょうじて対面に相成ります。お若と伊之助は頻りに身の

淫いたずら奔を詫び、何うかこれまでの行いはお許し下さる様にと他事たじ

はごさいません。妖怪変化のものは如何によく化けますといつて

も、必ず耳が動くものだそうにごさいます。そこは畜ちきしょう生の悲

しいところで。晋齋老人は何にも仰なんしやらず、ジツと見詰めてお

いで遊ばすが、三人の人間に少しも怪しいところがない、殊に不

思議なのはお若さんで、年配から言葉音おんじょう声、額によりまする

小皺まで寸分かわりません、只だかわつているところはお頭髪つむりで
げす、此家こゝにおいでになるお若さんは病中でいらつしやるから、
お頭髪なんかにお構いなさらないんで、櫛にくるくるとまいてあ
ります、今勝五郎のつれて来たお若さんは丸鬚まるげに結つていらつ
しやる。それとお衣類なりにちがつたところがあるばかりでございます。
晋齋老人もこの場の様子が不思議に思召す。何うもお若さんが二
人になつて理由わけがお解りになりません。成程これでは勝五郎が
恟りするも無理でない、乃公おれも八十年から生きて世間のあらゆる
事には當つて来ているし、随分経験もあるが、こんな訝おかしなこと
はない、根岸で伊之助が二人あつたことはあるが、あれは一方が
変化のものといふことの認めがついて、短銃でパチンとやツつけ

たが、今度のは怪しいところが些ちつともないから無暗むやみなことは出来ぬ、とじろり／＼お若さんを見ては考えていらつしやる、先刻さつきからいくら経つても伯父さんからお言葉が出ないので、

若「伯父さん、私が重々不調法のだんはお詫いたします、何うか御勘弁あそばして、こゝへつ伴つれてまいつたは岩次と申し、この人と神奈川におりますうち産みました子で、岩次、これがかね／＼お前にも話した根岸の伯父さんツてえので、お前には大伯父さんだから、よく御挨拶をなさい、柄ばかり大きいうございませうが、田舎で育つたんですから行儀も知りませんし、カラ意気い地じがありませんよ、伯父さん／＼」

と申しますから、言葉を交さない訳にはまいりませんので、晋

齋老人も一通りの挨拶をよう／＼なさいました。それからふたりの身の上についていろ／＼お聞きなされ、その間は少しでも油断なく御注意あそばしましたが、何うしても狐狸なんかでないよううでげすから、ます／＼不審であるから、これは病人でいるお若に遇わし二人を並べて置いての詮議より仕方がない、と御決心あそばし、

晋「お若や、ちよいと此こゝ処へお出で、伊之助が尋ねてまいったから」

と仰しやると、一緒に参っているお若さんは平気できいている。只だ莞にっこり爾りしたばかりで不審らしい顔もしません。やがて奥から嬉しそうにして出てまいった病人のお若さん、これもたゞ莞爾い

たして伊之助の傍へそばびつたり坐り、別に挨拶をするでもなく澄している。おどろきました伊之助、きよろ／＼とりょうにん両人のお若さんを見まわし呆氣にとられる。息子の岩次も俄にお母様つかさんが二人出来たのでげすから、これもブーツといたしています。晋齋老人は流石さすがに博識な方でげすから、二人のお若さんに目もはなさず御覧になつてゐる。するとお若さんの形こそふた両つになつておりますが、その様子におきましてはふたり両人とも同じことです。一方のお若さんが物を言いかけますれば、言葉は発しませんが一方でも口をムグ／＼いたしておる。また一方でお頭髮つむりをおかきになれば一方でもお櫛つむりでお頭をおかきなさる、そのさまが実に不思議でげす。そう斯ういたして居りますと高根さんの門外で容易ならぬ人ごえがする

んで、晋齋老人耳をお立てなされ、縁側へお出遊でばして生垣の外
 を御覧になると、若い男女なんによを三四人の男が引立てようといまし
 ている。そのうちに女は何うすり脱ぬけましたかバタ／＼と晋齋の
 邸内へ逃込みました。窮鳥懐にいるときは獵夫も之れを射ずとか
 申すこともあり、晋齋はもとより慈悲深い方でいらつしやるから、
 お内に二人のお若さんが現れてごた／＼いたしている中でげすが、
 何うも見捨みすてておくことがお出来なさらぬ。直ぐ書生さんにお命
 じなされ、兎も角もと門外の男もまた男女ふたりを引立ひつたてようといたす
 若いものも共にお呼込みひきたてに相成りました。さて、段々と様子をお
 き／＼に成りますと、引立ひきたてられようと致した男女ふたりは品川の和国楼か
 ら逃亡した花里と伊之吉でございます。晋齋老人は眉をひそめ、

これは怪けしからんことである、娼妓などを連れて逃亡するとは怪しからん。伊之吉といえは勝五郎の世話で深川の大芳棟梁のこへ養子にやったお若の双児ふたごであるなど思召しますから、いよゝゝ恟りなされて左の眼のふちの黒痣ほくろにお眼をお注つけあそばしますと、ありゝ正まさにございますので、あゝ困ったものだ、併し不思議のこともある、親知らずに遣った伊之吉が、母のお若うちがいる家の前で品川の貸座敷の若いもの等においこまれ、己おれの家へ来るとしても因縁であると、何気なく花里の顔を御覧になると、これにも左の眼のふちに黒痣があつて男なん女にょ差別こそありますが、貌かおだちから丈せい恰好がよく似ている、これはとまた恟りなさいまして、花里に親の名をお尋ねなされると、大阪で越前屋佐兵衛と申しましたが

商しょうばい業の失敗で零落いたし、親の為め苦海くがいに身を沈めましたと、恥かしそうに物がたりますを晋齋老人とくとお聞きなされ、それではお前さんはお米といいましたよと仰しやいます、花里も呆れいるところへ、奥の間から二人のお若さんがワツと泣きながら転げ出で、

若「これ伊之吉やお米、お前の母は私ですよ」

と意外の言葉に伊之吉とお米もびつくり致し、たゞじろりく顔をながめるばかりでございます。晋齋老人は目をつぶつていらつしやいましたが、あゝ怖しいものは因果だ、この親子は何うして斯うも幸ないであろうと、伊之吉お米が双児でありしことをおはな談しになつてお嘆きあそばす。この兩人ふたりもこれをきゝますと呆れ

るばかりで物がいわれませんが。やがて伊之助も岩次も出てまいり、親子兄弟不思議な邂逅めぐりあいにたゞ／＼奇異のおもいでござります。晋齋老人は花里のお米が身に付く借金を和国楼へ償却いたすことに相成り、この一埒いちちうつはつきました。さて伊之吉とお米ですが双児きようだい兄きょうだい妹いもうととき／＼では、お互いに身を恥じ何うも添遂げることが出来ません。そこが因果で別れることも出来ないところから、この兩人ふたりはその夜よのうちひそか窃に根岸ねがしを脱出ぬけだし、綾瀬川へ身を投げて心中した。死骸しがいが翌朝よくあさ千住大橋際へ漂着いたしました。

こゝに又二人のお若さんでげすが、何うも解らずに其の晩はお休みになった晋齋老人、いろ／＼お考えになるとフイと思ひあたられましたは離魂病という病で、この病は人間の身体が分身する

もので、わかれている間は双方ともに何事もなく生きておれど、その分身した身体が一つ所に集るときは二十四時のうちに一方の身体は消えてしまい、一方の身体はそのまゝ死ぬものと古い本などに書いてあることを思い出され、いよゝゝおどろいてお在でなさると、果して伊之助と一緒に来たお若さんの身体が二十四時たつと見えなくなつて、間もなく病人のお若さんの息が絶えました。伊之助も悔りいたして騒ぐをいろゝゝお諭しなされましたが、これも因果と諦らめ、遂にその夜のうちに首をくゝつて相果てました。わずか二日のうちに二夫婦と影法師のお若さんが亡なり、晋齋老人の家は大きすぎでげす。これも因縁だ因果だと思召すから、それ／＼葬りのこと懇ろになされました。四人の死骸は谷中

へ埋葬いたし、老人も落胆がっかり遊ばしていると、跡にとり残された
 岩次でございませうが、まだ年も若いにいろく、奇異のことを目めのま
 前えに見きゝいたし、両親に別れたんですから現世このよを味気あじきなくぞ
 んじ、また両親や兄姉あにあねの冥福を弔とむらわんために因果塚を建こんりゆう立し
 たいから、仏門に入れてくれと晋齋にせまります。老人も至極も
 理つとものことゝ、ある住職にたのみ、岩次を仏門に帰依いたさせま
 すると、それから因果塚建立という文字もんじを染ぬきました浅黄あさぎのぼりの幟
 を杖つえにいたし、二年余も勸化かんげにあるき、一文二文の浄財をあつめ
 まして漸ようよう谷中へ一基の塚をたてました。扨さて永々続きました因
 果塚の由来のお話もこれで終りと致します。

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の四」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年9月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の四」春陽堂

1927（昭和2）年6月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年6月30日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

根岸お行の松 因果塚の由来

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>